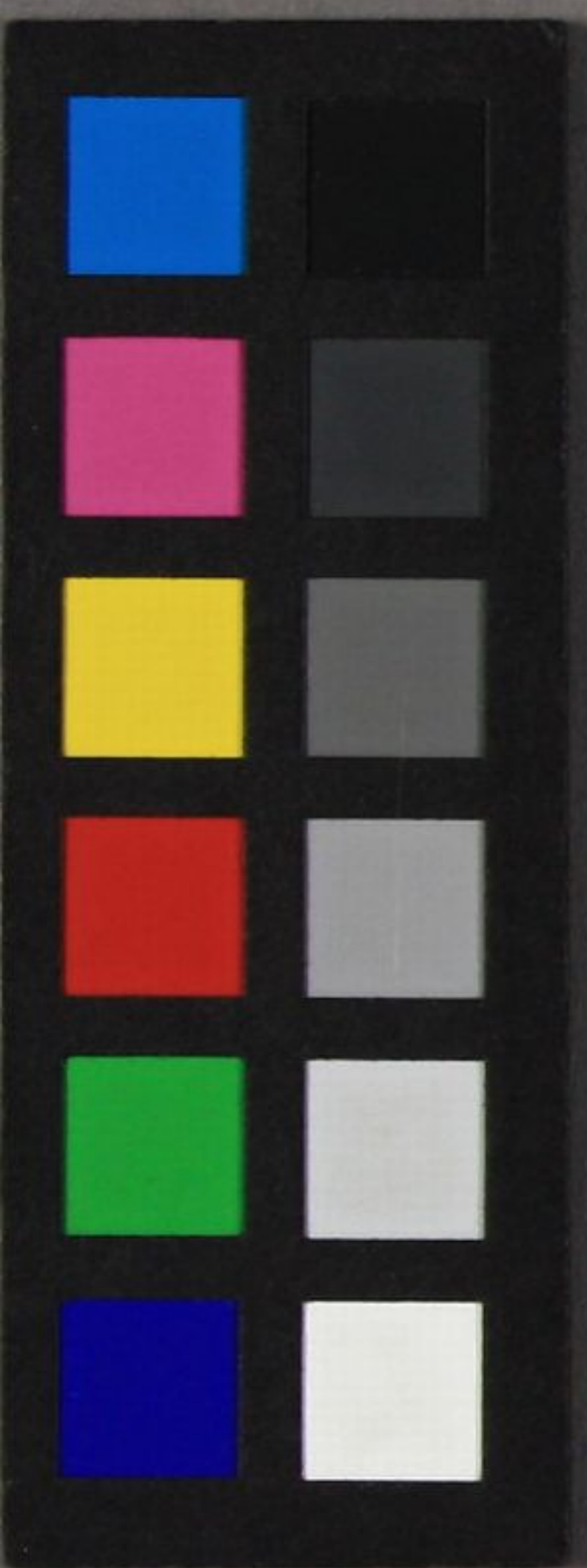


芭蕉公附合集評註上

中村俊定文庫  
文庫 18  
774  
1





おぼがつねよ古の附合集をるばよ  
ちちあささぞつひよ古の評注成か  
たふめまのこもに公相を志するといふ  
べしかりが依諸よ若くはふさうとは  
中きをあらさきくしるべしわが辭  
成まゝどくらくらひかかりとらまふ  
心を因ぶ、さぐるち用を専らし

芭蕉公相附合集評注上卷

紙の記

二十五条曰紙ハ発句の余情と氣との  
面ふくなるやうに成るべし紙のちから  
持てる紙のくろくはあらざ

酒債尋常往不を

人生七十古來稀

詩何きむごまをむさなる酒債ハ

冬 湖日く水く馬よカスル加馬コイ紙

発句詩高人といひ酒債といひ詩人酒



徒の何りきぬをのぞくをたゞけくを  
 湖と音ましく用ひるよのまゝる程と漢  
 句のまがごとくつくりてむせ句の余情を  
 何らうたりけれどとれみたり粟の  
 依階として又一神あり公卿いまゞ正凡  
 のまゝ面目をけられざる時のたゞいふれ  
 バッ希極とまがごとく  
 霜月や階のつづくあらびみて  
 冬の物日乃何れありりて  
 けぬハ志とふ人のかごとまゝる急るまき

秀逸ありぬのりき二句の間ふらるるが  
 めしけとて冬の日は解ふふの役く  
 水を解きする時者却て分二ふみ  
 体とつひるよのまゝ注とつあぢく大い  
 ものぬとつひるよのまゝ注とつあぢく大い  
 いひたらるるものよ何れ口をいさだか  
 ちやらばたがふものやけり公卿もこの冬  
 の日乃依階ふらりてはじめて正凡  
 のまゝ的をけられらるるよのまゝまゝいけ  
 ぬ何りきれどつあゞいふのらとに

水合 二 廿  
あふ水バ巻中まゝ古流の体真此流  
あふるるりあふるるる流の意よ此を甚  
あらしきもの之はてららの流體のつくく  
あふらびあふくと句づらめ此酒はなるふ  
韻字ふてもあふるるあふるるりらあふ  
ひはししたるるる水を流のま体とい  
ふるもく流才三ふさく流才の三流  
あふるるりら師軍更年さけるるる有  
る水祭句ハ天よりてかちあふるるもの  
あふる流ハ地よりてのあふるるるをとり

あふるり才三ハ人よりてあふるるるをとり  
どる流ハのあふるるるをとりあふるるる  
あふるるるをむねとあふるるるのあふるるる  
とあふるるる韻字をもちあふるるるを本  
式とす本式ハあふるるるハあふるるるあふ  
まふるるるもの、あふるるるハあふるるるハあふ  
のあふるるるりらあふるるるのあふるるる  
もあふるるるあふるるるあふるるるのあふる  
又ハあふるるる風吹のあふるるる韻字ハ假  
名ともあふるるるるハあふるるるり才三ハ

紙とハヤウカリウキ動くるををつらひしる  
 ねふ節くが本式なり申こもてぶつて  
 らむたのどをまら用ゆるのハけかまも  
 とも動くがねなり志れ才三の志辨  
 たり外の假名ハ行辨読字ふるど  
 ハるの辨なりけまい草天地人の  
 こしとをまらざればね才三のクシし  
 流小と極式といふものハかゝる危くか  
 なる危くらざるものよてかゝれば向づり  
 かゝるゆふありかゝらざればみどり

世小宗通ちといひく依借をアキナふ者  
 何みつけの因ふつけ借よ秘傳といふ  
 をつらりく人をエラ探びく借ふるのハ  
 人成けりてアキ借をむさばらむとの  
 志りざなまらことハ依借ふ借よ秘傳  
 としつらりハたきものこゝれハ何づらぬ  
 けしありことなるれどけまい草のよを  
 一たるのの秘傳のやういふ者何まきを  
 こがまらハハひつ

檜竹立一雪を人下のやどり

稿一つりね 口とつてとゆく

飛句旅 差ふ雪をいのちとまゝの風  
の旅人ふうち候く 稿よとつてとゆく  
おとやう乃けしきをつけたるるりこ  
行辨の紙あり

時ハ秋を建をこめ 旅のつと  
厚をとまぬふやう 風の月

飛句ハ送ふの句あり時ハ時として秋  
のあり水よれもろき時ハ不不太和歌  
此ゆしきれ何まき一を建をうけての

旅ふ水バまはめく 何り水なるの ながめの  
つとも何のらむなつてくうらやまのく  
ころ付水とつよころをうけく 内水が  
つが身生 渥旅より 旅ふ内まらへ 旅ア  
とも 蔭まゝの 風や 流水のよのべるき  
身を何り水めすくつよ何いさらの紙  
なまアを 旅よのむしり 詩よきとも  
ふたふ

江戸様 ころかよハむくまは  
蘆 堀の 両相平 かへりくる月

公おハか一つ〜江をさげあふ〜  
 一ほごの人あきバ時あ〜の庭〜  
 江をバ田〜い出あふらむ〜  
 を時あふ様〜志をり〜他〜  
 の西いさつを〜け〜  
 ちあふかつり〜とあふり〜  
 ちあきバけ〜う〜  
 走ろ〜ぬふ恰をめ〜  
 一おわろる〜ふ〜  
 き〜え〜るま〜よ〜くわ〜  
 解ま〜  
 吉田

及ぶぬ

時あ〜ふ溢カキかり〜  
 火 煙の〜  
 桑白〜  
 門の溢を〜  
 庭〜  
 をたの〜  
 子孫〜  
 火 煙に〜  
 みぬ〜



分貝彦ちゆめと早下したるは徳を  
つぐとハ滑<sup>コッ</sup>能<sup>ケイ</sup>のこもバ

芭蕉雅か其向ふ草鞋<sup>ワラヅ</sup>のほら

月と紅菱ホ茂酒のとを

桑白ハ公羽の 芭蕉明かしく 鹽<sup>シ</sup>ふ

ぬをきく扱うもといへるをきり

ろの向ふ草鞋かへりていふや何の

吉調の一紙ちゆめは他意いふもきり

がく一紙の月とぬまハ何のこも

たぐ風流もたつていふのこも

て何のこものちゆめとけりてかの  
芭蕉雅かしくは向をたぐ雅か  
鹽<sup>シ</sup>よぬをきく扱うもいふ向るを  
向のこも草鞋か水なるを不向  
のこもバよとめたぐへる芭蕉雅か  
て何のちゆめとけりて何のちゆめ  
いふはあやうちきしてハやあらうちゆ  
どけなく何のを見ても強<sup>ニヒ</sup>りある  
この何のちゆめ

宿まぬらむ西川ちゆめは杖の巻

老蕉とあつふ風の破笠

柔白はいつらもくもく西行よてまさば  
う宿すおらとむせと向うけるまよいや西  
行のめきそるき流りまよてはな  
老蕉とや〜〜はふ破水安きさたり  
なげぬる昔よて〜〜とさ〜〜と  
る旅ちなり老蕉とふ風の破笠をい  
へるひびきゆ〜ふやち〜柔白も公卿  
の帯よ西行を〜〜とあ〜〜の〜〜り  
ての化ちなり

花の咲きたがら草の空をうま

秋千〜〜はる〜〜條のくづをれ

柔白はふらきんをあら〜〜る他く公卿の  
才が像傑なる我見〜〜何り水は人を  
〜〜世に用ひ〜〜のばみ人のからふ立  
て園のニハナも何づら〜〜むをき人  
おなるをるおのちふから水〜〜せ  
水は流ふ老ぬふはちちを〜〜からぎや  
さ小どろの人よ〜〜ハ〜〜く何れが  
たさちんよ〜〜とたがひなくニハナ

したるあつろをかきやけく句つくりて子  
のなほふ花の咲くを秋すしるあつ  
うひなまをねはりがむ成人のちりみたる  
にねとろきてこいれういし入るる出何  
秋ふ志なるく蝶のみる氣もなきく  
づをねるる赤きあましくとくいしと辞儀  
謙退のことばあり他者の句をつくる  
十七字十四字の間ふかぎりなきたろ  
ろありくく口上をのべるがめし後ふな  
ふうくあつろをとく久よ

師の操むのし 拾ハむ木の葉か

さくたふせおのねは 四十一  
みれ句ねともふ古詞あふまきとえがに  
解しねたりとも 毎々血のりく  
霜の宿乃旅藤は 飯屋をまて  
古人がやうく乃おの本うら  
みれ句けききそせお乃者ふんをやまの  
もたのくく時をあらぬ飯屋をまてをまお  
らをもむいふのめばやうくせせしねが  
さむとあいらりしたるくまことふ飯屋

をさふきこるふハ何らねどもさふおひさる  
ものもたのしきあはれをさうくさひのび  
たふくねハきこよその詞をうけてさ  
のきこひさうらねたごひなれたも  
ろさふのふさう何きさる人もかふるな  
つうささるふさう本がうさをき  
るもこそさうつさうたれとたりの何  
がさやのさう何れさうあはれなけ  
れど何れさうさあはれさほをのびるもの  
あはれさうものがさうりなごふさうかふる

るのハ何れさうねたごほ氏物強なごふたや  
あはれさうりなり

甘なよよ茶<sup>茶</sup>あまご一五三の

竹立もくさやさく<sup>茶</sup>庭の卯の音

茶<sup>茶</sup>旬のつらめつさうさうきさうさか  
らさうさう強てさうら<sup>茶</sup>甘なよよ茶の茶あふ  
ゆさうのさう道をさうらさう五三白茶さう  
さうさうりなさうやさうたさうさうさう  
らむりねハたやその茶あ入さうさうさう  
さうをさうら<sup>茶</sup>垣根の卯乃らたハ雪うと

何や—まればうづねもろく、位を—たれば  
旅のうけともなぐさむ。せむらひ、不  
免く—くろそやの花乃雪とハよめれ  
どおのそるといふゆいまどけぎ依階  
よそかくつろり水ふや何や水かまれば  
酒の存臭もくくうらぬことバるりまべ  
くはぬの句なればとてユゴトあなれと  
おぼえくるハをうらなり吉酒よハうら  
ぬ句もたなくころ  
めぐり—や旅葉の中乃公羽中

澹シの甘彩カキとく手たる冬梅

葉白と旅葉の中乃公羽葉をこつけくる  
風情何となく向上あるふ冬梅寂シ土  
の甘彩カキふ手たる—おぼのけふたはハき  
たる旅葉ま  
葉と旅葉それほど神もほ—  
旅葉のそねをみま。眼メ  
葉句葉と旅葉ふ手たる—  
旅葉あまがれまはまであつあるもはだ  
そぐ廣くつひくる詞あり葉と旅葉の

中をかうくはまぐくの流うつらんぬふらむ  
 がるれぬど神もほころびぢ流ふやうき  
 あふりもも見えぢちを志ふところといひ  
 なくはめたるあろえ流はそれをうけく  
 いやく左採もどざらだ流森のまのまはたき  
 ふやう水てはまのハ眠をきらきぬどのま  
 あり小はおださるゝことくたし  
 精飯ヤキや伊らん古の雪ウグ小ク飯キも伊  
 砂サきくうめーりぐそ乃流

うら古の雪小飯ウグきらむきんめくカキ義  
 あむいぬいりそまのうら又ハをーキ所  
 くもきうらむとキ傳人の流をうけりくる  
 あろをうけくいもキおんまのめく砂  
 をあててまきめー、きうめーとまうた  
 る流あめまきんぐくキ弁白飯八人と回各  
 さるがめくキ或ハ向ゆ〜或ハ人のま〜ぶ  
 夜ト或ハ人の相をかへていやく〜はまハ  
 ありぬといふキ飯八餅八餅の流何れ  
 どキむ白ハもと流およて何れをいひ

出むもはうら水ぎ旅ハそ水よをさぐるお  
たれバ人のことバふかぎりたのきかめくその  
時くのようきまよきまよはきバ五辨ハ  
辨ハ九辨十辨ありてもさるるだうらぎ  
おどまかきさおたごハぬんの人よあり  
ふまきけてまめよまのたをきバ何んがち  
にかうるべうらだ  
いろくの名もむつしや春の料  
くくく 篠ゆさるきはめぬる  
傍の草辨の旅たあり吾昔句旅ともあり

のまは春くこ評をさるるだうら  
けーたあふ二十五条ふはさりあり  
水尋ふわが宿せま 被水好衣  
たは 欠くかをる 風の 草志 なまき  
吾昔句ハ公卿よ尋ら水く 子か者を果下  
したる化えぬらうく 旅ハそれ旅あり  
さつしき 西宿一まわめくそ水バた  
欠くかやくの風も草志の涼きふよと  
うとほめくそあり 風のたきものこつ  
くめくそハ依借あり

おらうお林ハヤシたよさるのよ化カま

田タ植ウエともれ終ハヤシ乃ハヤシ終ハヤシ起ハヤシ

吾ハヤシ向ハヤシ公ハヤシ祖ハヤシを田ハヤシ家ハヤシ小ハヤシとめくるちうハヤシの

ろくハヤシ終ハヤシたぐその地ハヤシふをうけり

るぐぬも志ハヤシづうよハヤシすバからびずや

酒ハヤシ志ハヤシひあらふはハヤシはハヤシるの月

は酒ハヤシも定ハヤシたぐまハヤシはハヤシらうハヤシ一ハヤシ房ハヤシぐぬのから

びたるをきつけたる李ハヤシ杜ハヤシがハヤシ紫ハヤシに秋

夜ハヤシ蘭ハヤシなるまを酒ハヤシ志ハヤシひくる終ハヤシらむ終

のくけうハヤシかぐたをるやうにまを

志ハヤシるをハヤシ一ハヤシてみきハヤシばハヤシみ波ハヤシの田ハヤシ植ハヤシ唄

公ハヤシ之ハヤシ何ハヤシらたハヤシ免ハヤシむふハヤシ終ハヤシのハヤシはハヤシるハヤシれ

吾ハヤシ向ハヤシハハヤシ終ハヤシ人ハヤシよハヤシあハヤシあハヤシゆハヤシ一ハヤシくハヤシみ波ハヤシの田ハヤシ植ハヤシ唄

をきりハヤシをむとハヤシ終ハヤシハハヤシ終ハヤシをハヤシゆるハヤシハハヤシ衣

後ハヤシ衣ハヤシ何ハヤシらたハヤシむとハヤシつハヤシふハヤシ本ハヤシよハヤシ衣ハヤシふハヤシみく

わぐぬきハヤシ終ハヤシがハヤシ終ハヤシのハヤシ何ハヤシらハヤシとハヤシむハヤシだハヤシきハヤシ衣

後ハヤシもたハヤシ衣ハヤシハハヤシ衣ハヤシのハヤシ終ハヤシをハヤシるハヤシまハヤシせハヤシめ

てハヤシはハヤシ衣ハヤシちハヤシあハヤシうハヤシもハヤシ何ハヤシらたハヤシ免ハヤシむとハヤシつハヤシふハヤシとハヤシろ

をハヤシはハヤシるハヤシぐハヤシぬハヤシまハヤシとハヤシかハヤシけハヤシりハヤシはハヤシ終ハヤシをハヤシ世

小ハヤシ對ハヤシ何ハヤシといハヤシふハヤシみハヤシ波ハヤシといハヤシふハヤシ衣ハヤシとハヤシ對ハヤシ



田舎のけしきもけしきも  
見きばやあまか子をちぎる糸の如

るの糸ををきふたらむゆめがほ

これも物不附くたるけしきもけしきの

下さぐみほるがへてらめあふのけしき

いつる田舎のけしきもけしきも

時ぬるや花まで流る 松のま

宿たまたまをとむれりうま

みれ白ふくやけしきもけしきのけしき

を見くくききききききききききき

何ひあらむがやまで流りく花も

末ぬふとつふくろたらばきくよ時ぬて

やあらど又い志がけしきもけしきも

うくい度く時ぬふけしきもけしきも

損とても何れもきききききききき

は流りくけしきもけしきもけしきも

のききききききききききききき

らむがたぐーがけしきもけしきも

たき流る赤きをききききききき

録のよるべなき者なとめの子君い

草のめさ人なりと比喩しく阿いさし  
たるなり

奥底もなきて冬木の梢多

小春ふ首のうごくミナム虫

おれも阿いさつツの露向ゆくツ君と赤の奥  
底もなきて冬木の梢乃めくまじく  
まじくも見えまじくやうにツえちといふ人  
をうけて保のわが方をケム謙譲しミナム虫  
のやうなるけ方も君が阿いさみの小春  
は阿いさまりふ首を飾さるとツ紹介く

わきもけびよ梅よりツ奥のツ萩枝  
茶の湯もツ跡るツ雪のひよ鳥

柔白ハ梅もならぶ山木といへるころ  
ろく梅の奥なるツ萩枝なれど梅  
は凡流も阿やうりくわきもけびよの  
阿いさつなりツ根ハけびよといふ保まり  
茶の湯とつけたのまじく方をひらきと  
なり

わがツ梅ツ割ツ 枇ツ杷ツのツ廣ツ葉ツハ  
心ツ見ツふツ 飾ツくツ 山ツ 萩ツ 乃ツ 花ツ

海  
二  
二  
二

あまも均不附めくはききもそんちり

梅ふみえく日永し様とつくり

東の空乃 虫 葉よつり

葉白いみり一の山のやまますまといむ  
とびらありくは花や咲べきといへる若水  
院よその清 聖のこことバをかりて梅の  
花もちりそし梅はまどく咲ぎはちがれ  
日をいうよくら内むとつあそろ之根ハその  
時ふのやんそ外ふ何れくはくそり  
かきしあ水は新の根ちり

いづくと復の花は神ふちる

ひとり茶を搦そ殿のひつふ

まことふは根ちるハ葉白をたまけらるま  
がらまく飛さよ何らぞまをんく根の葉  
トかくは白のめくちるをんしつづくも根  
の花乃神ふちるハ葉のひつふ家の葉  
持ならで外ふつとぶやひしりつふ字  
つづくふよくたまりくちうら何り嘆む  
るは何まり何ぞ

時 ちよまふまく春の友茶

秋をこたへてはらぬの片一秋

こゝれも霽句の何れをうつけたるまぢり

句まはらぬらなり霽句も詠ものまぢり

晴<sup>トム</sup>吟<sup>ボウ</sup>の詠をかくえる西日くさ

汝<sup>ニ</sup>そはりくる草の種乃く

霽句晴吟の詠をかくえるふいさひのそ

浦名この序例所と身く草の種をいひ

西日くさふ汝はりくるゆめがぬのりま

をつくしなふ秋草の風情をまよふ入

そはとやいむふく心をつくべき詠く

文鳥の羽をかいつくろひぬゆづれ

いと吹 風の本乃葉まづする

こゝれ草の詠なり二句詠詠の中

みも名有るき依借なり句まはらぬ乃

ゆくしるふちりるまぢり詠詠の依借

の法<sup>ホツケ</sup>まぢりたぐこの一ふふとあるま

ことふ正風のまぢり目とまぢり

市中ハものまぢりや夏の月

日者しくと門くのまぢり

かまぢりも詠詠の依借なりまぢり

飛合

十冊

たぐふ凡の的くあれはくまのつらまをこ  
 ちつきごと毎月の月へ降しとこう何るべき哉  
 市中のものくもひちちらば暑くうらめか  
 ることつてをたぐへおお白きよく見さざ  
 ぬくもゆめく後家波ひささるる  
 涼しくとつふ山家の根なれ  
 灰汁桶のちややくしらてきんぐ  
 波りさるりく音森さるる秋  
 朶白シヨウ朶シツの麵を見く根ネ寂く  
 莫くカクの貌カクをつけり灰汁桶のちややく

と落やめバきりくさの鳴出さるるつらに能  
 うまきりく音森さるるをれものやどり  
 なるるぞ  
 せや出しり二ふふなる柿サキの葉  
 白田の花ちかふる卯ウの花  
 公翁とふ東が藤柿今ふ滞るあの時依  
 借ちり朶白ハ藤柿舎を顔さるる  
 根ハもむせつちり  
 こそ茶の濃も何や生大根  
 みるけく籠る小室のス標

花白き葉ふ生大松のとり何ハとをう  
 だ化ありいづのも大松も幸ひ葉もきくら  
 むかる家ハかるらぎお定はとめてふぐ  
 らた小蝶のふらぐりくる山道さあけり  
 の古家と見くる銀之  
 春風やまの舟ゆく 水の音  
 陽あいきむつた乃 くらぐち  
 春うと二句の間ふあふゆり

葉経干き世の端やゆふ涼  
 葉 経干き世の端やゆふ涼  
 葉 経干き世の端やゆふ涼

あろろこふ二句の趣を墨をバ都を二三甲備  
 たる在まよのさくふとあれはむあふるがふら  
 ちひさきく川あふれきくく のらぬあゆり  
 てたハ山あふべー 宗の庵子世をきて  
 葉経干たるよその世はたふりぐあぬ  
 まりて写中人の家内の涼いぬるさほ  
 やがてたの思きくまり空のちらつくを内  
 の子ども乃見つけくく 葉経干の  
 るれぬがけふ咲るあふら  
 唄あふらふとや秋の日ぬる

神合

暮もくらく吹 帷子<sup>カマシラ</sup>乃 絞<sup>シ</sup>

時冬のつけあり

新妻ハワざとまゝ 矢ぬ首<sup>カド</sup>逢<sup>デ</sup>

まぶお故屋の穴たるよりあり

係の系絆の尻ま〜くわくの枝を〜

つゝ〜り〜句あり

帷子ハ日くふさきまぶ 野<sup>モズ</sup>の春

紐<sup>モミ</sup>一針を 縮のこぞ 何又

か〜びらのさきまは〜くある尻ハ野の春

〜きりふて於タハ〜り〜と涼〜

尻もろの時ををゆ〜と〜縮〜り時を〜

け〜りけ〜て縮のこぞ 何又 紐一針と

よく在子の根絆をのべたり 東山のま

れ公羽のはら〜と〜は〜句を〜と〜と〜

むべあり

雨<sup>ツ</sup>佳<sup>ル</sup>乃れく〜末ハ海ゆ〜聖をゆ

秋晩のや〜ま〜魚〜も〜と〜り〜が〜〜

ハゆま〜く〜海子ゆ〜ゆ〜時粟の穂は

中よりぬつ〜と〜公〜穂の〜ら〜け〜ゆ〜げた

時合

三十一

らむハのぢまきこちやとむまびて附合ハ  
二句一首の哥と見るを一といハばは解  
もがく一首のしこちとみるこ

残る故小給美てあるはきき多  
舞の葉あがらふ足あるは深紙

時ふと場ふとの紙あり  
秋のふれ先くふはむ屋うま

と秋小森やうり秋に森やうり  
係の草新ふて甚洒落の紙あり登  
句ハ先くも秋晩の海邊やう人里

まゝく家も見えむめむはむだうゆま

ささびーちやうーた何ゆさよあるを凡  
獨のひり紙と見くかくハつけくるるは

豆の花咲ふりりあるの縁  
夏の水鏡乃けしる海川

場ふらるがめー正凡のまいた中なるべ  
猿筆ふまれくるおれ乃松七海八

日ハまきり紙ど志づうなるはま  
登句ハ後紙の美何め時白なればは  
そこの猿の筆ふたの紙も紙くを紙の松七



まゝさぐめーとらふそろをあらむり紙もろ  
のころをいつらひたる紙何り

第三の歌

詩何きむど年をむけざる酒債は

冬<sup>ホコ</sup> 湖<sup>ニゲ</sup> 日<sup>ヒ</sup> 水<sup>ミヅ</sup> 馬<sup>ウマ</sup> 加<sup>カ</sup> 馬<sup>ウマ</sup> 裡<sup>リ</sup>

干<sup>ホコ</sup> 泥<sup>ニゲ</sup> き<sup>キ</sup> 夷<sup>ヒス</sup> 小<sup>コ</sup> 糸<sup>イト</sup> を<sup>ヲ</sup> 油<sup>アブ</sup> る<sup>ル</sup> まで<sup>マデ</sup> らむ

紙の歌もいつるめくこの時ハ中まぐさ風ハ  
入らざり 時をあらばのちふ正風のまゝ面目  
をいらしめる時の依替ハ何ひぐさくさ水  
紙古洞ともみあり 栗<sup>クリ</sup> 狎<sup>ナ</sup> ともいふ白<sup>シロ</sup> 三<sup>サン</sup> 糸<sup>イト</sup>  
白<sup>シロ</sup> 牙<sup>キバ</sup> 三<sup>サン</sup> まぐさ<sup>マ</sup> 漢<sup>カン</sup> の<sup>ノ</sup> ま<sup>マ</sup> ぐさ<sup>サ</sup> ま<sup>マ</sup> つ<sup>ツ</sup> り<sup>リ</sup> た  
る<sup>ル</sup> な<sup>ナ</sup> り<sup>リ</sup> ま<sup>マ</sup> べ<sup>ベ</sup> て<sup>テ</sup> 古<sup>コ</sup> 洞<sup>ドウ</sup> ハ<sup>ハ</sup> 漢<sup>カン</sup> 語<sup>ゴ</sup> 詩<sup>シ</sup> 債<sup>サイ</sup> などを

多々くつふるをめぐらまきつりふきたりぬ  
ると見えたりけし水どけ花白ハ甘く用が世の  
待哥に何をぶ人を何ぎけりたるみて紙牙  
三もろのころ何れといつりいづちあらむ  
ゆ雪ヨ乃こもも襦ハキもこくゆる  
雨相ふまこくも紙於都のめ  
聖ミヤコさままで尋する蝶の玉をいこく  
家くの後の日注解まきづらくゆづる  
水仙ハ見るるを春に花たけり  
窓の面目平ひらく葉且

赤猫ふのら猫過る鳴りびく  
花白ハ水仙ハ冬のもれなきごとくも冬のいそ  
ぎよ見るるもなきて春ふなりてころな  
が欠たきといふころスハ紙ハ花白ハ葉且の  
ことバきたかりんご早春と見えく葉且を  
つけるたたら紙牙ニハたきこもも葉の  
りかきめたりも猫の意をつけり牙三  
の指しやみふがめ  
梅たえく日長し梅いまく  
赤の窓乃虫葉ふつく

巢の中ふ葦の顔乃益びぬく

葦白根ハ先ハ解したる海つゆ之ヲ三ハヤハ  
又根の始ふてつけ去りも葦白のふハ何  
らぬやうよつりたるもの之ヲ三ハガざら  
まき登く附白ハ三句のわくめをオ一とま  
ま山灰やいらに総とハ思ひ水ぞ

雪ヨをもくなきおまがらの松  
海士の子が鯨クジラ報告る貝吹く

葦白ハは身総ハ居なきらま山灰の何れ  
たらたのるに冬をも忘れ総を忘るだり

ありと之根ハ葦白の始ハ常のふハ何ら  
ぞおまろく住なきく何るもたぐ  
人あらむ雪中の寒おも懐子うちぬ  
おまがらの庭の松ハ雪のかるをたがむ  
るまぬもの者と見たりオ三ハそのふ  
をいたるく根の松を浦をこしり  
たあ海人の子らが見吹く鯨のまのるを  
告るるそく附合の本旨みるあり  
葦の陰かこびみの花めつらや  
おくやたらむ庭は第ハキギ木

附合  
上

三十五

七夕の八日ハものけぢびりて

みせ向ハ何れのまゝなる新紙ハその始不才  
三巻の第本を抄くや採むといふ水を  
星みおれ後然とてとてたる冬ゲムの又去  
ちあり巻小毎カギ握の葉たごのちらぶり  
て七夕のたごりを見まゐる風情を三小  
く見えたりも花の陰よりもとてきざ  
名人の心陰心をつてべ  
傾城ゲイセイゆきまゝたごらむまの巻  
陰コゆたごりみかみのたきもの

吹まぐは袴のひごけ何らみ

棄白ハ其角ありかれば今とあり溜タダを  
不フ騎キやゝ世路を薄ウスむじつぬ小五原  
たごり小春樓サイロウに徘徊ハヱイして酒後サカ不フ定テイ  
るのを好まざるおけ向何れまゝにニか水  
が本枝の白あり根ハ棄白を一擲イツテキセム千  
金キムの公子コウシと見えたり路ゆふたきもの  
まゐる騎キヤウ者シヤをいふ牙三ハ何の引ヒキ牌パイで路  
巾ふたきものまゐるハなる人あらばまゝ  
けをうき人乃やまゝふとりたるたき

附合  
上

三十五

まらぬぬどろぶうぐいよまの産  
 火をうつさるり冬ゆづらひま  
 一季の侍りハ妻にたさすわく  
 五白ハ俺人の内まねハその妙よて火を  
 うつさる小堂の乃内唱の似海ひらるその  
 ぞく清采の藝をつひ牙三ハ農家  
 とわあして冬の雪も我妻村の流と定  
 矢をを三白までつげらるこ  
 乃ぐぬも志づらふきけバからびすや  
 酒走をあらふはどろろの月

藤 袴 泣 泣 居 小 め て つ ら む

五白句 流ハ定牙とまきつゆく牙三ハ酒も  
 己の産は流と見くぬがらまハかくむり  
 衣の居あるよ不自由あるものをとどめ後  
 衣の舞一とつらりらるとたむ水さるら  
 まふとりたりあり  
 雨をゆく粟の花さくは見え  
 いづきののそよ小啼ある 禪  
 夕白く小禱が 龍面は月影  
 五白句 流ふらまを定一才三ハ四家の夕

湖合 三十一

銀時あり

涼やうを又習ひらよかつて子  
市の子どもを送るる面布

日記もてふ言をならぶる涼こし

霞句おえなすし旅もそのゆふに才三六  
旅ふよりなりしと夏の暑た申す涼しむ

新しとあま

洗足不実し名につくをさうな

徐飯あらぶをむき乃里

みるゆの階子の溢をこゝへ来て

きこえくるまうたらむ

薊株や水田のう一乃秋のせえ

著るける日ふ代りゆるる

衣う一襟ハ馬乃きけり

霽句田野の秋を画るるがぬし銀ハ唇を

をのくつるのり才三とよるるを果

たりしゆだし衣う一襟下ハと霽句銀

の優艶なるを何らひ下るるのきけり

てと清替の詞教をえてるをのん

たるも陰何より人の及ぶふをらむや

海合 三十一

三十一

三十一

年々を益ふ秋乃花かむ  
膝ふのこころを花に世の本がら

音の月より静る人み宿り

桑白に主之の佳魚カクに曲水キョクスイの宴ユヱ乃學マカび  
さむしたむきたるに根ハ其夜ふ平家なご  
かこり出くるはまるりや二六將ドてまづら  
たふるゆふこし何ぞハひかり月を對して  
此に世がさなかりおろふ其おは凡俗のえを  
くをいひめて奥ふ深さをたぶらうの此に世は  
きくもせぬさまのうく舞舞舞く深

入くる老れものまがごとく

秋妻ハわざとさくめぬ首途の家  
まのくお板屋のやとくさるなり

馬時のるくはしき三好のやみ

桑白根ハ先みいひつや三馬時こりこり  
依階あるべし白きあを

雪の根をいれちるんは根き

日乃出るおの春さあ元  
下又者をひと船候ふちぬく

桑白ハ雪をいれ根をいれいひり根ハ

冬のりーたきぬ 謹むに何まりあまの  
はまぐらぐらよき句ハ解とむくまらばかいつて  
第二義ハ落才三ハゆりき名高き句之  
公おとの句をかぬくさくらみたましく三  
まできまらるるがつひふこの巻の才三ハ  
出さるるとなりゆきまらるるまらるる  
西相ふ今ゆくや水汁の星れあ  
笛の音氷るにうつさ乃 橋  
ひと番<sup>ツガヒ</sup>雀のまらるる森る松あり  
落白然ともは古洞なるみ才三ハめでた

ま正風舞あり 雨も又松あり  
松林ふまらるる何げなるみそ水ハ  
待ねもーろくはゆる<sup>タカ</sup>暮<sup>カシ</sup>  
ひくまらるるぬぐる<sup>ナカ</sup>ハ下子風<sup>ゴ</sup>  
落白然ハまきとえたるまらるる才三ハ  
なまらるるまらるるむ解まらるる  
いろまらるるまらるるまらるる  
あまのまらるるのまらるるがら飛  
大松れらだぬちれあらるる  
落白然冬のまらるるの才三ハめでた



ふる凡のたぐ中におのちらりておろろ  
うたすまぐまへうばま味くらむとまよに  
こころなしきばらうく口をつぐむのこ

牛流き村の内とぎや五月あ

まふ木ふき地 梅 燈の花

一 枝の 芝ふ ぼる 森 けし 何あ

舞向入りづなるよ日をねがえよ  
ゆるあふをえね新とらみてるねの花  
ふがる向多し 流ハ真ふよて村のなた  
くさ梅燈の木なるもどる 才三一枚の

芝ふ居るが小くめいし小を森 たる大木  
の陰涼しうりぬだ

美木 陸川をまけ出く 瓜の暑さ  
野に小 蟬の 鳴える 志干

かち 石 持も かりの人と 吐し

舞向 照つけゆる 瓜を かけ 芝屋の 向つ  
思ひや べし 流りく たる けり たる 才三 七

の 何く りあく 徒 置き ぢの 吐る べし

う はり 手 縮の 袖 たる 想 多  
層も たる 色 ぞ 海 池 乃 水

白壁の中より 礎うちろ欠て

みま白は代のゆくあるをいりよめでたきり  
ざり之根ねもていたゞりたぢつひのた  
れどそこあゝあよみねんきまよいつひたれりか  
るめでたきち代ゆくある固とて居も  
え奈れどとつよくろと才ニハ引持どて  
白壁ちのちより打出る礎の新しとな  
まどくふねちつゆふ何らひいひめ  
松風ふ新酒をさすはねき  
月もかたむく石垣のく

町の門返る麻乃飛くま

三向とも白き明らなり

三十一

合上

第四句の歌

二十五条よ白四句めハ洗更大子の垣不  
軽こつよハ祭句旅才三まぞふ音ねくる  
おとるべーこつやり句さるやうにいひあし  
まど一巻の赤な化け句ずりたどまるおつあ  
お一合とハ淫しなるるりそく  
齒<sup>シ</sup>及<sup>ダ</sup>本の葉を油持人乃舌を直て

ふの虫つ成おー何けの春

才三ハ早春ふたどめて持さるる人あ水が  
止齒<sup>シ</sup>及<sup>ダ</sup>本の葉を矢のよふうけてゆくそろふ

らむりろの持人の薙<sup>ヒキ</sup>をそ何ひて園のさ  
たどふたさるる時々の門をたしぬさる  
りそろもこえ又ハけ持人ハ侍<sup>サマライ</sup>及<sup>ダ</sup>本のわざ  
こりあしなるやうにもきとめいづ水子  
たろろハあさくこままのいけまきあ  
をつけさるる  
田<sup>タ</sup>標<sup>ヒシ</sup>わさる持<sup>シ</sup>及<sup>ダ</sup>本の葉乃何さる  
こ<sup>コ</sup>あ<sup>ア</sup>子<sup>シ</sup>宿<sup>ヤク</sup>る<sup>ル</sup>片<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>中<sup>ナカ</sup>道<sup>ミチ</sup>

たもろき附合あり才三ハ持のまのざ  
のゆるふこあつとハ思ひよるまきを片

附合

三十三

の中乃宿の世ふをいものからいふて何  
がー君あどが跡のまきと見むとて思ひ  
てこさをたるを一板の宿きしころあり  
りし田標りるゆふと来といつまがこきを跡  
といつる一字まきし甚しういびうをこる

かへる鴨かへらぬ鴨もはらまき

十七シキ日ヨリ晴山を 出くる 月

たゞりまきをつけし七曜山と山の名は  
まき。後何し山をさくしよむだ  
水せきしそ登森の石やあふはむ

夕ガ登ヒ跡のまき生うまあり

才三ハ左不よう何ふて家の前に  
流る川あり其川中石をたきく其  
うまき登森あるはまき四向めはまき  
其河をりをつけしものありがたつり  
つけるも一神

月出よ跡をからむ酒もちて

民の宿のけぶる秋風

才三ハたよ跡さとまりて酒をどの  
何ふなちるがと育の月乃をやく出は

酒竹筒もちくく伍の扉屋を叩めて月  
 を見むとならうちうちつれゆくき四句  
 めハ扉屋ハ武備<sup>ゲイ</sup>生<sup>シ</sup>きなるふりくわりも  
 月見酒もりなどの花鳥何るべきふふ何  
 らざるを恭平<sup>ケイ</sup>の代<sup>ダイ</sup>あはれとそ扉屋を  
 叩めて酒もまはさるれとつれろよて民の  
 かまどハふぎハひみりりといつる所をふとこ  
 たるありかつハ廿<sup>ニ</sup>秋<sup>シュ</sup>の豊<sup>トヨ</sup>秋<sup>シュ</sup>たのこをま  
 へるべし名人の<sup>シユ</sup>段<sup>ダン</sup>山<sup>ヤマ</sup>豆<sup>マメ</sup>一<sup>ヒト</sup>ふゆらむや  
 村<sup>ムラ</sup>るふ市の<sup>シ</sup>伍<sup>ゴ</sup>屋<sup>ヤ</sup>を吹<sup>フク</sup>りて

町の申ゆく川ねとの月

才三のけしき村<sup>ムラ</sup>るふ建<sup>タテ</sup>分の吹<sup>フク</sup>るひて平  
 のかり屋も吹<sup>フク</sup>らるるささるるささるる  
 句<sup>ク</sup>めハ庭<sup>ニワ</sup>の面<sup>オモ</sup>ハまどかさるるぬふゆぞさのさ  
 けりげなるささるる月<sup>ツキ</sup>くるあつらるる  
 さだりゆのち風<sup>カゼ</sup>大<sup>オホ</sup>るもたちあちりれて月  
 のてりあさるるささるる町<sup>チヨウ</sup>中の川<sup>カハ</sup>ねと  
 つよまてる悔<sup>クハ</sup>のりささるる  
 旅<sup>リョ</sup>人の<sup>ヒト</sup>風<sup>カゼ</sup>かさるる春<sup>ハル</sup>さるる  
 えたもあつらぬ方<sup>カタ</sup>刀<sup>タガ</sup>のひさるる

才三よき句とまゝこふ依借のをうか  
たのぞんぐし四句めこその人からをける所  
たりまじだしく附句にかゝるるふみあふを  
くぢりし風ふと念ふものつくものみらば  
いつも附合ハ新くぶしく正持るるべきを  
風ふた刀とつけたる流涙ぬ彩しとを  
義あつことを志るべし  
い陸公旅のな  
おしとくま

掃よをとて消る雪をやかしくらむ  
石のくぼこに墨<sup>スミ</sup>成<sup>ナリ</sup>摺<sup>シ</sup>り

消るる雪をくみく掃よをとてかき男を  
風流のえをと見て石のくぼこふ墨を  
とて雪のながめは詩<sup>シ</sup>弁<sup>ベン</sup>たどがくさぬ  
したり

投<sup>ナ</sup>りてき岨<sup>シノ</sup>の編<sup>アミ</sup>摺<sup>シ</sup>きカこめて  
風<sup>カゼ</sup>岩<sup>イワ</sup>林<sup>ハヤシ</sup>火<sup>ヒ</sup>小<sup>コ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>月<sup>ツキ</sup>の照<sup>テル</sup>不<sup>フ</sup>の  
まことえたるあしどよをさ句く

野<sup>ノ</sup>と屋<sup>ヤ</sup>ぬの火<sup>ヒ</sup>濃<sup>ノ</sup>もゆもまゆあふ  
山の阿<sup>ア</sup>な<sup>ナ</sup>く乃<sup>ノ</sup>待<sup>マ</sup>きさゆあり  
才三の春<sup>ハル</sup>多<sup>タ</sup>にけ<sup>ケ</sup>るるひて四<sup>シ</sup>句<sup>ク</sup>め亦<sup>モ</sup>乃<sup>ノ</sup>

附合

三十一

句ハナルきど花のづらなる。春もこの何を  
もどなく季の句乃後句ハかく何のべき  
了りあり

二般入ハたぐやぶつりて見とつけて  
あぐらとちがら 次第もつちり

人<sup>ニハ</sup>情<sup>シヤ</sup>世<sup>ヤ</sup>戀<sup>イ</sup> 二句のるふつとせり

暮冬ハえなく橋をうけゆ

門小顔出さく 月のたぎり

弟三ハいなるおふたハえなく橋とつちり  
ハまるいどたぐおくにけハぐしきる橋

を暮冬ハえなくとたをうけつひるな  
まごど四句めハるのころりなとさく春  
ハる花のため秋ハ月のためよかけは橋よ  
て暮冬ハえなくあたらむとつけるもの  
ありり一句のころハ下をあたむの意  
門小顔出さく物をさるはやく  
於凡にむりふ合おな喚立て  
返し手<sup>ノ</sup>のころちくさるの生もの

けさるころもなうらむ  
家<sup>ヤ</sup>者<sup>ガ</sup>徒<sup>シム</sup>を春のよききたえ附

工のたぐりに一何ぐる茶の壺

これハ炭徳の一餅あり家暮る徒を春  
のよきまきふとあり付くる人ハ茶ニ商人の仕  
合よりくく買とむる茶もは茶小壺より  
きるはまこ

第五句の部

雨佳見る窓の月かまろあり

風吹ぬ秋の日 瓶小酒なき日

古調ハとくくからのけのをいありね  
お向ハ侍人などの窓共ハ小獨坐一と月下  
の霏をちあがめあふるはまこ五句ハ秋の  
日乃ちびーそに風も吹ぎ瓶小酒は一なき  
寂莫のりた之瓶小酒なき瓶と侍よ  
くつありあり

旅のまに窓をやつて飲を



三ノカ  
子 船

買ハむ月を海

四句めハ朝敵テウのためよにうけはれくひろふ  
空を流しまぬらむ付控えめはるく  
まぬかきしなる軍士のたまけ之五句  
め残よてあろ買べきに恥ふ控買ふは合  
あゝにちあふ人あらぬ是人こそさうさり  
七時山を 出りくは月  
町づらり粟のこげる 砂をけ  
きこえがくしんぐ  
碎くき人の之府ふとわつく

けしの賀れいで面白や能ふが舞

お白洒つてめがかりてはあしき  
賀のせと見くる附合あり 老ラウササイ子シガ  
ちのをよくめるさうもあらむ  
いつら鳥エ帽子ホ子のぬげるま凡  
成るやら馬乃何さうぬ何さう  
四句めハ自身さ人の控何さうびあるたを  
白ハクめ白馬バ驕オゴツくはむとらふ子のまを  
をつけり  
か日カ平ヘたはまるるる原のまを

付入

三ノカ

七月廿九

入月の夜他寝する衣老ひり  
 赤白習ふ歩のたきゆるとつ小僧替の物  
 小てゝる原を習えとくひそらよ何せゆ  
 く小習ハ歩ぬれくるはあこむ向ぬき水  
 を流衣老と見く何やきまぐこの若此  
 えるあぢゆげ入月のふぐらたふけごも  
 えぬど何くゆれすゆりくくくくくくく  
 ーからぬ衣老一跡<sup>トツキ</sup>為げきーたるゆえ  
 何人ちらむとの附合あり  
 川小顔おさ、月乃たるるん

雲行も秋の日しをたばむざ降  
 赤白に月のくるるく晴くるるるるれど  
 秋の白くをたたちあかりめてかきき  
 更ほくなくばむざと降しくる存か  
 天衣なまきふ海くべき附合の衣際  
 なる  
 嵐ふたむむ無乃細く片  
 桂木屋ハ桂木ふ刺をかきむ  
 赤白を桂木屋の底に見くるる附合  
 狸<sup>タヌキ</sup>衣<sup>イ</sup>ね<sup>ネ</sup>おどさ<sup>シ</sup>降<sup>リ</sup>張<sup>リ</sup>の弓

七月廿九

まいら戸ふさるゝ遠りける善乃月

四句めきいめくはびーきふと見くまいら戸  
ふさるのりひかめく人も住びざありける  
吉原女乃はまおまごきこきそおの者  
一灰うちた〜く〜め一枚

まのりめいねもみいらぎふ自由はよ  
たのきき伴持たをどふ下る時らつもけ付句  
を思ひ出〜く後もこがるだくり言人乃  
志〜り〜くなる。ぬり句さひき〜るま  
なれど道中のま〜て目々

たあらん〜く〜十の子

よ代種べきものをはま〜く子の〜  
お白十の盃あらべたるハ老の酒をりハ  
何らで子の白れ盃あらむと思ひ〜めが  
ついた人の子ののよハ何ら〜とやどの  
針ふつけ〜り一句も〜れま〜る白ふ  
て〜めでた〜句あり

ハ除けま〜るは本を〜く〜  
寝が〜がる〜やがて〜水の月

四句めハハ除けま〜るは本を〜く〜

家ぬゆる夕ぐれのまぐさ五句めハ何  
るもあつくたぐれと見ゆるのたけ  
向るりかくまらしくときえあましくたぐ  
このやれ〜まうもちうら何る句を  
正凡のたけ申とりよ何るう〜とかう〜  
ちのみそ

お市小人のたぐる夕月

木刀の音きこえたる居合ぬき

仗具大津あまのふ小都會こやうかいの何りきな  
解とをよの〜

上のたよりふ何ぐる早の並  
やの中さらしくとこ〜月のや

第四句の款につめ〜五句めもやりり早  
商人の日和の晴はや小價アタヒの高下を考  
るはあ〜世よおうほう〜つよもの〜  
きどろ〜る〜とあ〜る〜ころあ〜れ句  
のねも〜〜ま〜るま〜

ろつこのぞげハ酒のたれ中  
中藤ふゆ後も寐て居ぬ音の月  
お向一るの〜ちあま〜とえる〜  
春の

はるをけしきくつものぞいば海まを  
えの中とありきさめもその地を新うた  
む奥の産おふめい乃藤不取つらあ  
ざら人のり森てぬる者もたなく月まむ  
うひくはのそぬるこつけるこ

混雑の記

混雑の記  
巴はよみり  
の  
えの  
を  
あ  
紙衣

あまもい一るめくみあー栗の依諧ハ解  
がささありあ向極越の志と見く  
送子鳥帽子をぬぎく紙之を送る官  
を辞一たる人くくする所大をらむ

あハ  
肝  
を  
大集子

雷鳥のゆきるは  
あ向ハ  
朝州  
あ  
時  
の  
心

あらむら後白の返さるるあまの返さるる  
勲跡を送るの序みするところの返さるる  
てたるまよりの返さるるの字一字の附とゆ

夜<sup>ハ</sup>焦<sup>セ</sup>撰<sup>ハ</sup>つゝ<sup>ハ</sup>活<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>吹<sup>ハ</sup>

朝<sup>テ</sup>鮮<sup>ハ</sup>西<sup>ハ</sup>依<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>擲<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>途<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>里<sup>ハ</sup>

附さるるあらむ解さるる後白の太閤の

あつちあらむら

櫓<sup>ハ</sup>入<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>氣<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>十<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>荊<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>

此所<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>胡<sup>ハ</sup>産<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>世<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>夷<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>あり<sup>ハ</sup>

あ白の櫓入まぬ人を男と見よとまな水

あひたはが懐かみこそ男とありてつけれ

あ白までハ女をのりぬらさつけれハハ

あまのあつちも様げらばあまの胡を

あまのあつちも様げらばあまの胡を

山<sup>ハ</sup>聖<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>乳<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>餅<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>なる<sup>ハ</sup>

盗<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>井<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>伯<sup>ハ</sup>夷<sup>ハ</sup>が<sup>ハ</sup>口<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>洗<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>

あ白のあつちもあまのあつちもあまのあつちも

伯夷が首<sup>ハ</sup>山<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>巖<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>

あつちもあつちもあつちもあつちもあつちも

あつちもあつちもあつちもあつちもあつちも

はる伯夷のめき<sup>ハク</sup>潔の人も是ハはふなら  
むと<sup>ハク</sup>借替の何之<sup>ハク</sup>監泉を<sup>ハク</sup>監井とかへくる  
も<sup>ハク</sup>伏潜あらむ

<sup>アキボ</sup>嬰

の森を母ふけまされ

つひふ<sup>ホツ</sup>森ん<sup>シロ</sup>ちからぞぬり

お向ふくつみくもも出ざり  
鴨の森をふさえむとらぐ何たるを母  
のきこもめくる<sup>ハク</sup>辨之<sup>ハク</sup>後向まぐふ甘くみ取  
つけてとも<sup>ハク</sup>慈<sup>ハク</sup>きん<sup>ハク</sup>に志こがられぬ  
ハバせうもちま<sup>ハク</sup>りりて<sup>ハク</sup>あ<sup>ハク</sup>う<sup>ハク</sup>う<sup>ハク</sup>ハとむ<sup>ハク</sup>尼

ふち<sup>ハク</sup>ア<sup>ハク</sup>て<sup>ハク</sup>世<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>ぬ<sup>ハク</sup>ひ<sup>ハク</sup>て<sup>ハク</sup>あ<sup>ハク</sup>れ<sup>ハク</sup>む<sup>ハク</sup>た<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>森<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>ふ<sup>ハク</sup>  
ひくるを母のきこ<sup>ハク</sup>ぬ<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>く<sup>ハク</sup>さ<sup>ハク</sup>ぬ<sup>ハク</sup>く<sup>ハク</sup>ふ<sup>ハク</sup>こ<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>  
はめ<sup>ハク</sup>あ<sup>ハク</sup>ま<sup>ハク</sup>と<sup>ハク</sup>る<sup>ハク</sup>も<sup>ハク</sup>ゆ<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>ぬ<sup>ハク</sup>め<sup>ハク</sup>た<sup>ハク</sup>る<sup>ハク</sup>た<sup>ハク</sup>も<sup>ハク</sup>こ<sup>ハク</sup>  
ハま<sup>ハク</sup>くる<sup>ハク</sup>一<sup>ハク</sup>栗<sup>ハク</sup>ち<sup>ハク</sup>ん<sup>ハク</sup>じ<sup>ハク</sup>お<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>向<sup>ハク</sup>く<sup>ハク</sup>ゆ<sup>ハク</sup>り<sup>ハク</sup>ハ<sup>ハク</sup>ま<sup>ハク</sup>と

<sup>ハク</sup>擗<sup>ハク</sup>体<sup>ハク</sup>

かぶるもそののを

すは<sup>ハク</sup>海<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>水<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>え<sup>ハク</sup>乃<sup>ハク</sup>み<sup>ハク</sup>づ<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>ふ

二句<sup>ハク</sup>借<sup>ハク</sup>替<sup>ハク</sup>あり<sup>ハク</sup>あ<sup>ハク</sup>き<sup>ハク</sup>も<sup>ハク</sup>吉<sup>ハク</sup>詞<sup>ハク</sup>

月の<sup>ハク</sup>綻<sup>ハク</sup>か<sup>ハク</sup>る<sup>ハク</sup>ぎ<sup>ハク</sup>懸<sup>ハク</sup>る<sup>ハク</sup>縁<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>上<sup>ハク</sup>に

鳴<sup>ハク</sup>の<sup>ハク</sup>羽<sup>ハク</sup>ま<sup>ハク</sup>づ<sup>ハク</sup>る<sup>ハク</sup>お<sup>ハク</sup>ハ<sup>ハク</sup>海<sup>ハク</sup>を<sup>ハク</sup>ま<sup>ハク</sup>る<sup>ハク</sup>

天竺山

死—らぬ僧をいぢり草落

月の句さめく 蕭條たる不と見く時の羽  
さるふおあけさるりきをつけ後句結んで倍  
とらなり飛降り後の世乃こころをさかたぬ  
ぬ更は海をさる落のりらふこころに倍倍  
あふと落のりらふものくおどろくはる  
ものあふと落のりらふものくおどろくはる

時み山崎 今半 ときを

い世叶のどてらをを登ふ深なる

けとるものもあや

猶樹のやそよの夏を

一の娘里の庄屋小やまのいさ

お向お夏に猶よや出ぬふらむるさる  
こころ猶樹のわこ乃そををちがめて抱思  
へる片よ後句に其お思ふ人への娘さる  
お夏ふいひまづけるさお向りく星の元  
をにさるりらるるあらむ

鼻 名よたつこふ顔を妻見ル

時 なる然のヨクと啼々一り

お向お夏顔おてやよめと妻見るるり

海



後句ハまゝハちねの音にのこたる泡のすめ  
浮世ハ沈む空を<sup>カム</sup>空の<sup>ジキ</sup>塵

習ハ花を真室<sup>マモ</sup>一坐ハ内む儀

附合ハいづもあらむ句ハ坐ハ空<sup>ゴテ</sup>一坐天の

雪といふ語法を<sup>ク</sup>依<sup>レ</sup>借<sup>ル</sup>ハ<sup>ク</sup>た<sup>ル</sup>と

老蕉<sup>ハ</sup>ある<sup>ト</sup>の<sup>ノ</sup>蝶<sup>ハ</sup>た<sup>ク</sup>く<sup>ス</sup>と

齧<sup>ツ</sup>ゆる<sup>ス</sup>とい<sup>フ</sup>いた<sup>ス</sup>も<sup>ク</sup>ら<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぎ<sup>ヤ</sup>

お向<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>角<sup>ガ</sup>を<sup>キ</sup>ま<sup>シ</sup>て<sup>キ</sup>お<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>る

なり<sup>ハ</sup>悔<sup>ハ</sup>句<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>り<sup>ハ</sup>づ<sup>ハ</sup>め<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>たり<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>ん

角<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>た<sup>ル</sup>と

知<sup>ル</sup>入<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>し<sup>ハ</sup>づ<sup>ハ</sup>ま<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>ぬ<sup>キ</sup>ぬ<sup>キ</sup>

き<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>づ<sup>ハ</sup>も<sup>ク</sup>ら<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ぎ<sup>ヤ</sup>

お向<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>ぬ<sup>キ</sup>に<sup>ハ</sup>知<sup>ル</sup>入<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>衣<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>ち<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>用

え<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>句<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>礎<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>塞<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>曲<sup>ハ</sup>で

つ<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>古<sup>ハ</sup>酒<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>趣<sup>ハ</sup>

お<sup>シ</sup>小<sup>ハ</sup>黄<sup>ハ</sup>金<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>味<sup>ハ</sup>来<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>海<sup>ハ</sup>

黒<sup>ハ</sup>細<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ろ<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>め<sup>ハ</sup>が<sup>ハ</sup>氣

お<sup>シ</sup>右<sup>ハ</sup>が<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>け<sup>ハ</sup>二<sup>ハ</sup>句<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>あ<sup>ラ</sup>べ<sup>ハ</sup>た<sup>ル</sup>が<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>

は<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>何<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>あ<sup>ラ</sup>む<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>が<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>なり<sup>ハ</sup>お

白<sup>ハ</sup>能<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>あ<sup>ラ</sup>る<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>白<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>車<sup>ハ</sup>轆<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>能

句の巻乃中の句よてはるふちけさのたふ  
やむぐ着うらみあいつの句の巻向るり  
後の黒細の句ハ詩商人季を合算る海使  
くあいつの句の巻此は句の巻あいつ干  
氏き夷小界をゆるさうらむといつる句の巻  
句よてはるふちけさの巻も何らむはれん  
黒細の句ハ予四句の巻小入る巻をいつた  
一いつ二句をばあうらむといつる句の巻  
こつふだ  
栞 藤原公家本標の角を巻折む

寛平を使とて荒海の巻  
お白ハ琉球國などの浦を此夷のさもの  
後句もその何れり小魔法をわらふ者の何  
らむとの附句  
洪のらえ 猛き世小出よ  
虎 懐子 娘る 何らつき  
お白け猛き世小洪のらもいつたき英雄  
出よて後句虎を懐きふさうる巻見て  
妊くハきハめて洪のらえを生むとからの  
お後あつた小ねりく何れおもくげたり

山寒く四隣の床をふく嵐  
づづと火ききえく 指乃ともび

いづちあらむ解きよるり何とば  
西<sup>イ</sup>臥<sup>カ</sup>を 待<sup>マ</sup>つてお<sup>ア</sup>何となく

哀<sup>アハ</sup>いふ空<sup>ミヤ</sup>城<sup>キ</sup>壁<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>ぐ<sup>ク</sup>吹<sup>フ</sup>洞<sup>ツ</sup>るらむ

お白<sup>シ</sup>は抱<sup>ア</sup>女<sup>メ</sup>を<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>ぐ<sup>ク</sup>後<sup>ノ</sup>白<sup>シ</sup>の<sup>ノ</sup>ぐ<sup>ク</sup>ハ<sup>ハ</sup>萩<sup>キ</sup>の  
ひまこ<sup>ヒ</sup>と<sup>ヒ</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>世<sup>セ</sup>は<sup>ハ</sup>萩<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>花<sup>ハ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>餅<sup>モチ</sup>を<sup>ヲ</sup>ぐ<sup>ク</sup>

餅<sup>モチ</sup>お<sup>オ</sup>萩<sup>キ</sup>と<sup>ト</sup>も<sup>モ</sup>お<sup>オ</sup>ち<sup>チ</sup>る<sup>ル</sup>て<sup>テ</sup>ハ<sup>ハ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>

みちのく<sup>ミ</sup>乃<sup>ノ</sup>夷<sup>ヒ</sup>走<sup>シ</sup>ら<sup>ラ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>石<sup>イシ</sup>臼<sup>ウス</sup>

武<sup>ム</sup>士の<sup>シ</sup>の<sup>ノ</sup>體<sup>タ</sup>は<sup>ハ</sup>丸<sup>マル</sup>藤<sup>フジ</sup>戸<sup>ド</sup>くら<sup>ラ</sup>ん

前<sup>マ</sup>白<sup>シ</sup>み<sup>ミ</sup>ち<sup>チ</sup>の<sup>ノ</sup>く<sup>ク</sup>夷<sup>ヒ</sup>の<sup>ノ</sup>石<sup>イシ</sup>臼<sup>ウス</sup>を<sup>ヲ</sup>さ<sup>サ</sup>へ<sup>ヘ</sup>見<sup>ミ</sup>し<sup>シ</sup>ら<sup>ラ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>

後<sup>ノチ</sup>白<sup>シ</sup>ハ<sup>ハ</sup>夷<sup>ヒ</sup>の<sup>ノ</sup>毎<sup>マ</sup>に<sup>ニ</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>さ<sup>サ</sup>は<sup>ハ</sup>葛<sup>カ</sup>城<sup>シ</sup>の<sup>ノ</sup>大<sup>オ</sup>君<sup>キミ</sup>は

い<sup>イ</sup>り<sup>リ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>一<sup>ヒト</sup>休<sup>ヒヤス</sup>ら<sup>ラ</sup>む<sup>ム</sup>

庭<sup>ニワ</sup>の<sup>ノ</sup>が<sup>ガ</sup>づ<sup>ズ</sup>り<sup>リ</sup>火<sup>ヒ</sup>た<sup>タ</sup>と<sup>ト</sup>る<sup>ル</sup>た<sup>タ</sup>そ<sup>ソ</sup>も

宗<sup>ウヂ</sup>女<sup>メ</sup>石<sup>イシ</sup>玉<sup>タマ</sup>の<sup>ノ</sup>ち<sup>チ</sup>腰<sup>コサ</sup>の<sup>ノ</sup>ち<sup>チ</sup>家<sup>イ</sup>名<sup>ナ</sup>き

庭<sup>ニワ</sup>の<sup>ノ</sup>が<sup>ガ</sup>づ<sup>ズ</sup>り<sup>リ</sup>火<sup>ヒ</sup>乃<sup>ノ</sup>氣<sup>キ</sup>ふ<sup>フ</sup>さ<sup>サ</sup>ら<sup>ラ</sup>ふ<sup>フ</sup>み<sup>ミ</sup>お<sup>オ</sup>る<sup>ル</sup>ハ<sup>ハ</sup>後<sup>ノチ</sup>を<sup>ヲ</sup>  
ら<sup>ラ</sup>む<sup>ム</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>を<sup>ヲ</sup>意<sup>イ</sup>白<sup>シ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>が<sup>ガ</sup>づ<sup>ズ</sup>り<sup>リ</sup>火<sup>ヒ</sup>を<sup>ヲ</sup>漢<sup>カン</sup>土<sup>ド</sup>の<sup>ノ</sup>た<sup>タ</sup>く

火<sup>ヒ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>玉<sup>タマ</sup>の<sup>ノ</sup>ち<sup>チ</sup>腰<sup>コサ</sup>に<sup>ニ</sup>宗<sup>ウヂ</sup>女<sup>メ</sup>を<sup>ヲ</sup>く<sup>ク</sup>た<sup>タ</sup>ハ<sup>ハ</sup>み<sup>ミ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>玉<sup>タマ</sup>

凡<sup>オノ</sup>情<sup>ナ</sup>は<sup>ハ</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>た<sup>タ</sup>る<sup>ル</sup>附<sup>ツ</sup>白<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>

ね<sup>ネ</sup>ろ<sup>ロ</sup>さ<sup>サ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>定<sup>サ</sup>に<sup>ニ</sup>枝<sup>エ</sup>の<sup>ノ</sup>づ<sup>ズ</sup>ハ<sup>ハ</sup>松<sup>マツ</sup>

傘カサの陰カゲがくく〜らかこぶけく

お白堂オウダイの戸ドおろさぬこつよを傘カサちりが  
仕シり〜てぬふと見々るミミ後悔カウカイく

衣イをたつ鎌倉山カマクラヤマの契ケ保ホ一

志シぬるたもと成ナリ白シロ子コ凡マン葉エフ

お白オウ衣イぎと仲ナカ仏ブツちうひくチウヒク鎌倉山カマクラヤマの  
おくふりこもまたる人ヒトもきこえ又マタハかまく

ら山ヤマの仲ナカ仏ブツにちうひをきてたるともも  
いづれいづれちぢぢやちぢぢむ短ミダマ白シロいづれいづれも思オモ  
ひ入りて志シぬるをもとふ又マタ凡マン葉エフの白シロひ

白シロひまわり〜くわりをく心を動ウツれまがこ  
も小コせつたの衣イの懐カフるり

聲コエつつ方カタ小コ鳥トリゆる道ミチ

楯タテの葉エフよふふ葉エフ成ナリ之ノ終ハジメり

お白オウ聲コエつつかふ鳥トリのゆる法ホウ采サイの地チへり  
ふも匠シヤウ士シぬぢけ人の住スミをき阿ア〜り〜空ソラの

世セふも人ヒトよも見ミきだりれさかふ葉エフ成ナリを屋ヤ  
るはまの附ツケ楯タテの葉エフふかくハあふぬぢけを

ごあふぢあらの葉エフあふあふちぢたぢモ松マツ  
よて松マツの葉エフよとつよも同ドウド〜りありけまご



楯の巻よ小舟かくりの何きバ 然なきふも  
何らん

凡の音たたらふ 菴ツテツ乃いりめく

大口ツクなるる 庭の 雪 拂

前句菴ツテツの太なるがいつも ぬらびて 凡  
の音たたらふ さままでの庭ハ平人の家  
小ハ何らむときいて 庭の雪 拂ふ 大口ツクを  
そよぶ 太家の何れきぬをつけるものく

襦ハキ 織オリ花の 縁ヘリたおさおく

いっちある 附ツケ言コト那らむきとりがく 古洞コトウハ  
ほむぬかふる 念ネンなま

世の才を画エふの ぐいさる 茶の 煙  
妹イモがーら乃からぬや片カタた

おの画師エシよ何らで 画エを好ヨシと世ヨのまが  
いらでかこ 一ヒト茶チ飯イ烹クつて 画エよふけりぬる 煙  
居イ茶チどの 片カタまて 後ノチ句コトハ 画エよかける 女メの 髪カミ  
此コノからりよゆらるる といへる 附ツケ句コトま

羨ウラヤ飯イんき 室ムロの 松マツ風  
津ツの 園ニれ ちあま いくと おくめ



前白ハ夏人ハ何ル不の子母めくく於中て室  
 小ひより森してぬー居此差なのもれれまハ  
 ーくくキナ遊ユいろあらむくんきくくはまるの  
 ぼ白ハ志を成らよき句よてたど於のりきを  
 つけ経波りくめのおまの松ふきくく成ひ  
 たよのそなきど直句の次子つのかよれ難  
 波とやちーくひくく何く口ふたるぬ難何  
 ふよく筆ふたつくはむや

餅二かさぬえりーそよ常

若原のちよみ子の目れおひらむ

前白ハふお枕のおみ餅を用ゆるり源氏  
 お酒ちのどよも何のオモカケ餅めくく何ま小かすれえ  
 ーくくめくくいりひたあーべー後句ハ若原  
 の抱女乃いりひるりよとめあーたて  
 何が庵ハ踏るよ宿りま何くめよて  
 髪たやまををみくぶ身の内ど  
 冬の日此依階ハ家くのは書出くくわ  
 ーくくどけつけ句を何よ人の後みゆるよ宿りま  
 庵の人此髪ハやまきく見るハりろーかる人  
 を産ふかくまよまきくくちありといへるへりど

キと入ぬ卒に母ふまごとくと泣  
礼法の曉きく火を焚く

お向中しお卒に母のふ字乃きえゆきな  
ハもの思ひも着くらめ今ふ侍ハ目の茶は傍  
御とくかあり内たとく一ありよべ一後向ハ  
墓守の火を焚ぬるはま之きえぬといへる  
礼法のひきおとまねがく

二の尼ふ近衛の花ハ内りめきく  
餘ハむぐらよとけりあり内りむ

お向二の尼とつよわめりり一は思ひ

からけり一人の君もうれささぬひてみづ  
らそ尼となり君乃お言提とよらひな  
は人ろの尼はものぐりきく一人の君は  
裏へり或ハむりハふづりへき一人の今ハ  
里ふ下お多之後向もまどらろの人まふ  
身ハ様の子はまあるとかち信さるる  
今不 娘の火を放つ卒

盗人の記念の松乃吹を以て  
お向ハ思ひますけり 娘は火をほみつふ  
たどそのまををつけらるあや

何れもこの遊もとけし時を

秋水一斗もつてまねず

お向におまがら迷くまじく抱ざるを長

きあといむとて秋水一斗とつらふらふ

水時計のりありて冬のはれ依階へ

まき古油の体真何とくかむつりて

りしるおふし

中キムふ本モク桂ゲをたさむ民登打

早の政とあらふまのゆふらふ  
茶向ハ詩人儒者まじのからめきたるま

なめ 牛お人の何げつらみ計六が位許い

とよし

床ふけく語れはよくなる男

縁はまたげのねと跡まし

茶向きとえたるま、あれどをり一転白く

後向ははしこのためふむり 縁はあが

らねるるるるる思ひわくねあさな

け二向たれもく 傾城賣女のふふ

めれどろ水いろとあふらよころ何とべりま

ふたこくはまのこつとま



明日ハ敵ヲ首おらめさお

小三友ふみまらせむとつこひ

茶白ハまことに戦場の白をれど後白を

陣中チヌのりふとくハ何とらだきだて公卿ハ

附向ハ茶白のりふをかへくまうもよく附くる

花多一は白のりふハたぐ極まりの席と

碎更クヰのたふふ敵ハ首おらめさるまぬ

風どくくるはまるとゆ三友といふ名ハおれ

化名を水ハ軍虫ふ何るべき名をさるるこ

様おれ餅さゆる室不のるる

雪鳥ユキトリ起タく鳥の燭カともーく

あハハかぶるいくらのおまぶかハかきとつ

小様おれとつけくハおれ女メの室ハおれ

るより明らん一後白ハ極どくかの様お

た一さハくち何ぐめくるおの室とくく

物一るやけ一きゆまをつけくるこ

三味線セウミセンからむ不破シラノの糸人

道まがらみ波で打り其友をさる

凡ツラ狂の旅人さるる

月ツキおたくる痛イタの髪カミは赤結アカムスビて

著者口同五内  
人が

変さぬ 破 隙 隙をまつ

こハハ 軍更が 解いとう

ソぬの 三つ つよ 糸 ほつちり

袂より 硯をひらき 山陰小

山のたきまひ 破つつ 法のりきあま

見きぐーが さま 流 縷 ちんばう ころの石

子 縷うちかけ 旋 硯より 書いて 読む 山

あふよむまぐ

灯の光 あらふ 小 懐 くらぶる

きぬ 秋の さまの 力を 推エウづる

灯の光 ちつと ころ ちんばう 義と 對一 たる

何り 水 あり お 撰 ちりり

まがき 近 津 法の 水 小 ぬ 水 行

佛 喰 たる 魚 ぬ ぞ 記 け せ

つる ちの 何 ちの 何 ぐ たる 大 魚 の 佛 を く

ひ たり ちの 何 ちの 何 ぐ 新 き 越 向 り 何

くの 何 ぐ 何 ぐ の 佛 ね 何 ぐ ちの 何 ぐ

る たる ちの 古 お ぐ ちの 何 ぐ 何 ぐ

る 破 ちの み きの 由 田 ちの 反

る 水 げ 小 替 ちの ちの 花 ちの ちの

附 録

六十一

春を目前

雪の粒<sup>ユキ</sup>乃<sup>ノ</sup>園のらまめづら<sup>ニ</sup>記

襟<sup>エリ</sup>子<sup>コ</sup>首<sup>ウタ</sup>の旗<sup>ノボリ</sup>が片<sup>カタ</sup>彼<sup>カ</sup>をとく

お白<sup>シロ</sup>の雪<sup>ユキ</sup>のたむきふ<sup>ニ</sup>国<sup>クニ</sup>のらまめづら<sup>ニ</sup>風  
騒<sup>さわ</sup>の人<sup>ひと</sup>なほ乃<sup>ノ</sup>りくへく<sup>ニ</sup>似<sup>に</sup>埃<sup>あは</sup>買<sup>か</sup>のた<sup>た</sup>り<sup>り</sup>小  
み<sup>み</sup>たる<sup>た</sup>る<sup>る</sup>他<sup>た</sup>あり

けーの一<sup>ひと</sup>まふ<sup>ま</sup>名<sup>な</sup>をこ<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>を<sup>を</sup>禪<sup>ぜん</sup>

三<sup>さん</sup>日月<sup>にげつ</sup>乃<sup>ノ</sup>東<sup>とう</sup>はくらく<sup>く</sup>持<sup>もち</sup>の<sup>の</sup>志<sup>し</sup>年<sup>ねん</sup>

前<sup>まへ</sup>念<sup>ねん</sup>ハ<sup>ハ</sup>き<sup>き</sup>げ<sup>げ</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>な<sup>な</sup>た<sup>た</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>を<sup>を</sup>見<sup>み</sup>て  
大<sup>だい</sup>悟<sup>ご</sup>たる<sup>た</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>が<sup>が</sup>く<sup>く</sup>懐<sup>なつ</sup>白<sup>はく</sup>ハ<sup>ハ</sup>三<sup>さん</sup>日<sup>に</sup>月<sup>げつ</sup>の<sup>の</sup>出<sup>い</sup>る<sup>る</sup>さ

い<sup>い</sup>くら<sup>く</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>禪<sup>ぜん</sup>の<sup>の</sup>ご<sup>ご</sup>む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>呼<sup>よ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>み<sup>み</sup>よ<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>禪<sup>ぜん</sup>心<sup>しん</sup>  
固<sup>かた</sup>を<sup>を</sup>持<sup>もち</sup>たる<sup>る</sup>こ

ま<sup>ま</sup>が<sup>が</sup>飛<sup>と</sup>鬼<sup>おに</sup>と<sup>と</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>げ<sup>げ</sup>よ<sup>よ</sup>入<sup>い</sup>

ろ<sup>ろ</sup>の<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>日<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>ふ<sup>ふ</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>れ<sup>れ</sup>あ<sup>あ</sup>ど<sup>ど</sup>く

花<sup>はな</sup>に<sup>に</sup>と<sup>と</sup>が<sup>が</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>鬼<sup>おに</sup>花<sup>はな</sup>ふ<sup>ふ</sup>入<sup>い</sup>を<sup>を</sup>西<sup>せい</sup>行<sup>ぎやう</sup>く<sup>く</sup>ね<sup>ね</sup>が  
い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>花<sup>はな</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>げ<sup>げ</sup>よ<sup>よ</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>死<sup>し</sup>む<sup>む</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>き<sup>き</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>が<sup>が</sup>乃<sup>の</sup>  
空<sup>そら</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>光<sup>ひかり</sup>とい<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>奇<sup>き</sup>を<sup>を</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>お<sup>お</sup>く<sup>く</sup>西<sup>せい</sup>行<sup>ぎやう</sup>も<sup>も</sup>その  
空<sup>そら</sup>の<sup>の</sup>白<sup>しろ</sup>赤<sup>あか</sup>死<sup>し</sup>む<sup>む</sup>とい<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>ら<sup>ら</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>も<sup>も</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>  
ろ<sup>ろ</sup>の<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>死<sup>し</sup>た<sup>た</sup>い<sup>い</sup>とい<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>係<sup>けい</sup>の<sup>の</sup>何<sup>なに</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>え<sup>え</sup>も<sup>も</sup>西<sup>せい</sup>行<sup>ぎやう</sup>を<sup>を</sup>  
う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>や<sup>や</sup>した<sup>た</sup>る<sup>る</sup>公<sup>こう</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>こ<sup>こ</sup>あり

控ら小くくぬるり知事の放まきる

火にけぬ火燃たた人を見む

赤白に知事身ふたどく人の出くからぬるを

をいひたる之火にけぬ火燃にうもあま

トきものくちあまの侍もうつし何ら

らるたけしきあらむふお旬のさくらん

たるをを死りしるる人にしるるつむる

冬まつ 納豆たたくあま

花小位 桜の御とまてふるる  
赤白に秋季なる花をうけりてつ

たよものちり白きハハくならむ解がく

西南小柱の花乃つむむ時

る柔の河がら小 花よつむる

赤白柱の花とつふつし月をまきたるよ一白

の根幹からめきたるはあまの河がらの新

ものをつけく何つらひたると柔油柔膏

とてはふくくあまとぞ  
敵 白糸 糸 茶よのる

寅の日乃 且を 凝流のく死

赤白并茶よのまいつちるやハたぐま

たよみや後白の飛流が名海くささこの  
いのりや宣のまゝ起くは茶よのまをそ  
ほはまあり  
際さくする 曉 <sup>アサキ</sup> 花ふかりこまを  
待 <sup>ヒド</sup> 衣の下 <sup>ヒド</sup> 春風  
茶句をよりのまをそく見くめく曉の  
際ふむらひぬるはまは軍の出立よは河ら  
ぬどねどやらあらぬ世をいづかりよもおの  
具をたるまぐだ 仮衣の下よまうちよるひ  
たるまぐそく

磯とほまき 茶切平ゆ

秋の只詠乃ち連歌いとかりふ

砂とよま重のよまきりふ出のいづよもちまき歌  
の席あまべりいづお向のやまのちのねど  
ろりあまけりまよもあらざれば詠のちまき歌いと  
かりふよまきりたるま吉人のんを丹ゆる室  
なまよる

夏涼き 山楳 <sup>ヤマメ</sup> 小内くら見む

麻 <sup>アサ</sup> 加里 <sup>カサ</sup> つよあのおま <sup>シウ</sup> 阿む

お向うち阿がりたるふとりて 寄の茶拵出

は家とつけるるあり麻くりハ何の化名な  
 きど芦荻とも菰荻ともいふべきを麻くりの  
 其をもとをなむりかゝる集も何よべき  
 やゝの名をつくりけるまゝにぬく  
 山麓 雲 ゆるる本 瓜の山阿い  
 昔を覚えてるる子泪ぐとけり一り  
 卒雲の人をゆるり本瓜の山阿いを阿る人  
 神骨を見てりぐもぬとなくかちあらむと  
 かちりめもつともものこと 志を流の人とらへ  
 はつけ合ふや

けー尼の小坊まりふうちむきて  
 をるく蓮の實 ちくく瓜の實  
 作さるるを  
 豆腐 つくりく 母の 喪ふ入  
 豆 腐の 草乃 袂も 破ぬぞ  
 此坊小喪ふともる人を此家のえ取と見る  
 附合ありえ取 母小孝阿り人  
 ひとり 書を 読むる家の戸は中  
 二丁ほび 西小まぬとれきりぬあり  
 ひとり 出たよむる家の戸ハ二三丁も村家へ

だつたるを

榎エノキの風乃一豆がらをふく

寒き知小住持ビツガはひとり柿むきて

茶匂いもも荒さるのヒツ見一げもやうき住

持の柿むきぬる寒がヒツるがや

小僧コソウみくりがヒツまりる

物モノのヒツ陰エ出デ小あまのヒツをヒツ

来朝ライチャウの物モノ鮮人センジン小画コガをかきくヒツ茶チヤのヒツ名ナは

を飲ヒツさるヒツ砂サみヒツ僧ソウみくりがヒツとまりる

玉山タマヤマのヒツつヒツ大ダイさヒツのヒツたま

赤アカ衣イハヒツ笑エウのヒツをヒツもヒツてるヒツ笑エウひヒツり

宮司ミヤジが妻メケ平ヘイ一ヒツ保ヘ心シンらヒツれてヒツつヒツ

前マエ白シロとヒツ人ヒトをヒツへヒツたるヒツ附ツケ合ガヒ之ノ白シロハヒツ公キミの

もちヒツくヒツ笑エウひヒツ一人ヒツ成ナリ見ミゆヒツくヒツ恋コイとヒツちヒツり

後ノチ白シロハヒツたヒツのヒツきヒツ公キミのヒツもちヒツてヒツ笑エウひヒツをヒツまヒツ司シ

が妻メケ小思コオモハヒツれたヒツとヒツつヒツ小コがヒツとヒツり

入イレ月ツキ平ヘイ驛イキのヒツをヒツたヒツわヒツるヒツ穴アナ

駕カなきヒツ國クニ乃ヒツ露ツキ負ネれヒツゆヒツ

いらヒツたヒツらヒツむヒツさヒツめヒツがヒツくヒツ

一ヒツ輪リン笑エウ一ヒツ芳ホウ茶チヤのヒツ定テイ



暮の工夫二日牙る。目を眩く

おもしなき附合之何ぐとよぶやほどの暮  
うちの人と半うちけく勝負ふつの白さ  
めむと契りけくあふかへり定のもとふまづ  
ふ居てんにあざりしよを二日までユま  
しやしく思ひつきる。あふ目をひらき  
見れば定あのか茶一痛咲おくる  
笠おて衣のやぶま綴りぬ。

秋の鳥乃人くひしゆく

け句や人を愁殺<sup>シウキツ</sup>や鳥山<sup>トウサン</sup>何ぞ

のかへをものとも思ひたらでよまのよふま  
き破き衣<sup>キ</sup>綴りぬ。しよものに見て附  
たの之附ぐるハ志ばらくあて一句のやうき  
秋こし子字のよくまりりたはほぐまうま  
はたらりしよ何らざんがかる句をはくしよ何  
り。

美人のかたちおむうげうふ

裏<sup>ウラ</sup>の舞身<sup>マユミ</sup>奉<sup>ホウ</sup>た蝶<sup>テフ</sup>と身を倦く

玉<sup>タマ</sup>照<sup>テウ</sup>君<sup>キミ</sup>が古<sup>コ</sup>るをふくみくの他<sup>タ</sup>く

京<sup>キョウ</sup>ふ名<sup>ナ</sup>高<sup>タカ</sup>し 痛<sup>コバ</sup>の呪<sup>クサ</sup>咀<sup>ク</sup>





一海士の松をいさえんく馬子葉あがら

まこしきこえがくらんぞ強くいりぞお向ハ京  
居て海の呪咀ふゆをほく人之後向う水  
成樽づくこの海士乃松をいさえんくする  
尋ふゆい何や一げあゝ男ハ京小名さき海  
の呪咀何ありとつよくそあらむかぬ不  
やうあらぬ

月あくち桂のひびきハッるく

棺ハツケいそぐ消ぐくの霧

お向月もあくと西ふかぶきちまをまけ

ハッ射といふものまごまけしきをぞく見定めて  
人の今死する宿中たり

高コ野ノの懸カケ小島コつらり

紅ベニ深シの産ウ葉ハの干シ花ハナのまをマ往ユキり

阿アりのまマなるル附ツ合ケなるベ

酒サケ飲ムむ姨ハハのいイふ淋シた

双スガ六ロクのうウらみミをミにキつく

酒好の姨より舟のまゝはまふつけりき  
のふれ双ふよまけさるりぬくら然しきまご  
阿りてあゆらふいとむらふ人まぢり君ハ

いづれをぞそののびききとてふ淋一からむ  
とほひやりたる内まり

髪下衣付従が娘をとりへく

聖の宮乃何らし一故王され陸

米白ハ髪下一く嵯峨わたりふかくるはま

と身々かゝるゝりにゆえ何の聖のまはま

さをつけたる人

藝者を 留 執 名 月 の 舞

面白の托女乃秋の歌きぐらヤ

さゝの拙治郎コウリ六何らで風流のたり人乃

まのけぢなちよべー

川瀬ゆくモトヒ蛸を角小結付く

舍利とる滝小粒日うつらふ

吉田あつれば絆一がく一まべく吉田よま吉

田あたらぬ何のちの御も吉田ありこの後

のりつづべー

羽織小洒をかく執 様 屋

ふよの〜〜 女子カニコ髪 ねらりり

いづれをぞつけざるよヤ

アちれ一田のいろえ乃まをばりり

古今

三十三

三 船 舟 川 乃 秋

秋のきく川舟の秋をきくはねば終るる日を

いづ

花 出 ちる 叶 ころぎの暮る

いふ時方香る次矢を有あがら

田野之秋色

月明く折板山をるぞつらむ

雨之 秋 盗の法埋むあり

大盗人の入りし夜をるべし何ぞ盗人の  
の黨をむきびく何ぞ盗人が家に入る

何く山をさそくちをむのものがたり  
よのこのよりのあり

ひと川 兔の爪くらふま

立みよる人の 葉ふとぢらゆ

たししく立るる人の葉ふかくらひて

人高た野をいつりかきば兔の爪くらふ

ふぞく

凡くらき大まの秋七つ

川 門をたしく 生 狸の足

赤白ハ大の秋後白ハえ日の秋附えハ何

秋の

三十五

里のまゝ之

宿のちぢミヤダ小拵子をほる

えな祭ふ歌のま歌半付く

拵子を堀く宿のみやげふまゝ人をま歌

師と見まゝくハツク附句之

うぶ玉の髪まゝハツク女まゝにまて

えをを見まゝく。おがふの月

うぶ玉ハ萩とつよりの枕ハツクとまゝくハツク思ま

ら子たのぶも用ゆる海鏡の舟にたらしぬ

のかまきとてハツクもハツクうぶ玉乃わが思ハツク髪ハツクハな

でぞや何りルむといへるを思ひくハツク髪ハツクハもハツクより

思まきものあれハツクうぶ玉の髪と依ハツク借ハツクふ利ハツクひハツク

はえはくく附ハツクぐろハハツクあハツクくハツクちハツクぎハツクりハツクるハツク。女ハツクのハツクま

小まりてりまハハツクかく思ハツクひハツクまハツクくハツク。尾ハツクよハツクなるハツク

たり浮世ハたゞまハツクまハツクあハツクるハツク。の中ハツクあれハツクハハツクな

にをうたのハツク思ハツクまハツクをハツク思ハツクひハツクむハツクかハツクくハツク。はハツクまハツクまハツクぐハツクく

。さかハツクくハツク。思ハツクひハツク入ハツクむハツクよりハツクハハツクのハツクちハツクのハツク世ハツクれハツク。の

ころたろろ。ハハツクれハツク天ハツクをハツクハハツク思ハツクひハツクたハツクえハツクぬハツク。う

のハツクまハツクまハツクくハツク。まハツクりハツク。なハツクまハツクゆハツクめハツク。てハツクはハツクてハツク

と一人ハツクをハツクみハツクたハツクをハツク。たちハツクまハツクちハツクをハツク見ハツクまハツクがハツクりハツク。る

イキヨム  
ホツ  
キ

三十五

はよありのねがほしくゆくはるるのこころ  
きんしちよこ

陰なき於朝オのかづらりめ道

い五指くふあふさる 瘦 男

備色の御御置置のりーたあふべー

うちかづくお糸のまをちあつり

たのきくく天と 誼 笑ふゆく

ふきハ公おのこふる高き思の句まこと

意の情をつくせりつふべーお句ハや

ものにはよあのをたぐあつーみといへる

ゆりの川の指どてあふやーくらぬ人のた

はぶれまやーさものよぬびーたるはまた

あーく意のまことたのべた。えまいひぢめ

でたー

入日の 何と乃星あつらつ

宮やが波捲つも 花の 舞

星あつらつたのよるまよみえろめたを

社家のゆのぐれと見くまおさがる灯の健

つぎよゆくまがをつける画も及び

スギキ 書をたぐい くらみふたはる

将合

三十一

此世に負く麻すよ入篠の隈  
岸を切つて管にふくえき人の舟より此世  
負おく山くげの公條の隈ふ只ひとりかきあら  
して麻の香をまらばまへくまでえをく人  
ありらる

侘れもしろく 椽の粥者ある

更級の里乃きぬこをすふゆき  
くもたなドえき人の椽れかゆ老る椽お  
あつらばりしあつらおふゆくもろべ  
露を相ゆほく ぼる馬の血

坊主ど老老ともいさで 追えよ  
土の餅つく 砂よりねろろ

三句ともたぐりのころあーや  
生の條に焼つく煙るとなり  
日くれて 砂る 松が 切け  
山家のやうささるるがめし

ま白赤塩なた飯をつま向く  
泪 顔をよごらん 目 さま  
赤白赤者の 藤治のため 塩が ちかると  
見えく 目 病 成つ けるを ぬ

行八  
世  
世

舌根小念仏をやしよ居士衣  
小襟の縮の中ふつくそ

小襟下の片まこ

杖でうつ産路が 破らよちあり

いぢりふびむや 姨族の月

七目ふいぢりを對しける附句とれも又一鉢

花は垣根に穴が つく扉宿

かげらふまき 糸の 下糸

巾のうさち分子の足袋よ 春とちて

かげらふの句ハおの切ふのちの句指ドてか負

くきるま人のさしど一歳もちくる田かみ  
才子のわざけよあひてからき世をりるさ  
まをり

糸泉のかづら 桶の名をよる

葉垣のあるき 朝ハ 破まらり

多保意

土質もよむらり 旗ハ 黒石

平楽の忍びくわき 秋の風

黒石の切ふをよべ

髪さるる 宵の月ふひりめく

そつより西の吐乃松回し

松友ささる宵の人くねしあらびたる中

小西国此のどをよくきりたる人乃ものかざり

きよに松友ささる人の下そそり何れも松回さる

はまを

瀬小玉子ハ何とらあらむ

山系花の傍ハ水仙 梅 棗

二句ともあさるそそりなるれどたゞひならむ

たゞ之附合の中ハ必かりる句何れも上と

ハよくやりの句をささるそあさるれど

雪小 鞍 ねくハ 貫ガ馬

やどり七む大江の岸乃ハる家

雪に隣むハ貫ガるハ大江の岸小やどる

割<sup>ハ</sup>屋<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>状<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>蓋<sup>ハ</sup>

清<sup>ハ</sup>涼<sup>ハ</sup>報<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>先<sup>ハ</sup>調<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>室<sup>ハ</sup>北<sup>ハ</sup>沙<sup>ハ</sup>流<sup>ハ</sup>

おきしるきつけ句之度くの状通ハゆき

休人と見うハるハ涼報のお後ハるえあさる

の清涼報をまことハやふつらハるを

まじき報ハ涼報も金小つまりハるのりぬ

まじき報ハ涼報も金小つまりハるのりぬ



いよハ階格の新趣有里

宜松が、ま平 外も 虚つく

花ども里 <sup>中</sup>物を思ふらむ

二句直よていづれもをうき他あり句三ハ

きええるまゝなり

~~兼~~ 兼 鳥をなうめく

戈鳥の尾 花れ 結屋とよめ物

け句のゆつまびらやふ二十と条よらる

口なとづ

歌よを 未 好むら 松のそ年

有明の 梨打をば一送くり

け句も公羽の名高き附句之赤白の柏子ふよ

のめくえもハおめでた一白の柏子とよ

をーる一白えハおの子面なり

殿まが 祢野くぐりつる ねばらけ

えげる眉をかききぬぐ

けーものがめふあるべき併と

除<sup>こ</sup>勤のやまふ思ひうちふ

けりひの侍ハ階<sup>オキ</sup>る さまの中

は勤るまふ何ハむとちぎりたるもけりび

思ひ事なるはまな里けんど待りおひめて  
やりく陸のなるは子まめたるこいつとて  
の附合あり一白ハ陸を待て居たるが待り  
おひめて陸ハるの申し階たれこつとて  
ふきとゆれどはよハ何らむたも陸のなるこ  
とをやあしくいひのべたこと

京小 汲まゝる 碓井の水

五 川やねのくくこいつのふ見く

凡ほのえきんくの水かこの水あをまべて  
水をたのむ人之片きばこ玉川のこいつまで

めみーなるべー

餅つくる猫の産菜をお合を

賀<sup>丸</sup>子<sup>エ</sup>笑る 秋乃くくろハ

茶臼猫の茶乃餅つくるをちき汁ゆり  
見くいつ子えり笑る人の何くれあまが  
をつけたり秋のんハ秋の字あれが  
たろろをつくきり

姉待牛の一定よ日の親

約<sup>ハ</sup>ぬ越の宿<sup>キ</sup>を織<sup>キ</sup>ぬく

姉のほきを付兼るをふのやうきちび

扱ふむらひちがらお思ひぬはまこ  
誼のそりまて廿まの並びぬて

卯月乃雪を 握ニキるつくづぬ

そ向田粒の酒事りある。み雪を握るとま  
りを向いしらみちるこ

思ひぬ 半ニをうニこニ 傀クイ傀クイ

途ミチ中ナカふたぐる車クルマのいス屋ヤをヒ搥ヒて

おきし乃き所合之車の中ふぬる。お思ひ  
の何る人あるが傀クイ傀クイのこニまニ半ニをヒ搥ヒて  
もーやわがまの上をこニまニ何ニらぬらと

乃きくたづりし車クルマのいス屋ヤをヒ搥ヒるはまふ附  
たりお思ふ人の半ニ曉トキ待マちゆくかたのこニまニ  
志らむ

老の身此コノ襪ソクをふほニじふほニりりる。

君 流ナりきし 海ウミの 界カイは

前向老の身此ほりゆへハ老をがら襪をふ  
ほニじふほニりへニるハひニとニこニまニらニぞお思ふ人  
と見く 極老の界カイさニし ちまニ世ニの中ニこ  
だれて君さ一流ニき水ニぬニひニし 流ニの界カイさニし  
うニく 襪ソクをふニじふほニりりる。ちまニりりるを

らーたるえ

木の葉もちよ 榎の末も 沖を月

つゝけりぬる 崎乃くみもか

前白本がらりー吹立榎の本の葉もたつくと

ちよ木の葉もきりーきを死ふと身もくしひ

ものもがらりーた流人の何りぬるよろをす

たつと

い葉をくむとく 森ぬりーさ

火ありーてぬるをのこハ何れぞ

前白川びこのうひさき小屋みぬふくるまで

森もやらぐくつゝーさのい葉とみるふ小炬をど

ありーてぬるをのこハ何れぞとくめくるけ

たおふける河めさほ之山とえの炬、燈をひ

らひの炬をあるをー

はまぐくの葉れうをりル里月の歌

人一代乃 恋類とふ秋

さほぐのかをりといふすめ次ハ葉の向と

あーく月のおふたのくハむげものがあ

ーてたがひよをさなた時すめの夜をつ

まさでものがらるはまこ古お徳もかふる付

何里かきしるき付合ありル里

下戸をにくめる雪の敷乃亭

早咲の梅敷ふたふたと一たれ

米白雪の敷乃亭に付たをどつらり誣さめ

きるが中ふたふとく下戸あをるをのこをりか

たりあやけま次の句それをもけくく雪の梅

を赤身ふたと一水の氷とおの氷敷はるる詩人

酒徒の情をいり

明安き敷敷たまさくらが 後立ちく  
たはなを 晴ゆくほくきささやら

ゆきかをりきつげぐる之米句其の恋乃

明安き敷敷めよりほくきまをやくぬ

く後立ちけより小情能之あぬをくらき

くぬをが一つ風流才一のほくきん敷かこ

くゆき風流公のふらぎく後そや

舟よをむけ名月をたぐよやハ

せなるおるのこつぎ敷誣さく罪さ

米句は名月をたぐよやハまぐさべた何

は舟よをきくたのどつふさま後句ハまぐさの

の舟よをきく使の若者もちて罪敷こえけ

さぐさきもよりかきくぬる糸さる糸がごと  
ばのみつぎばりりハゆるさをあらむとをうく  
いひたると

稲妻の光く来まば筆投く

聖中のりくれ片神をまぐ

糸白ハ指ほるどておろきぬふハ稲妻の  
光りまあるふゆるき筆をま投まぐたま  
かくあれど後白ハお中よ精どくまとい  
いハ水子片神もぎくもどるほぐのせつる  
あふるかへたると

ゆふを干かきを借る旅人

命ぞとらふのまき舟<sup>つと</sup>懐<sup>つと</sup>干

附ぞろハ旅のまき舟師の追たけりのおま  
くふ下りくゆるんあるまき舟くまて旅一  
ゆふよなるりたる之はれはるの月此まき舟を  
懐<sup>つと</sup>干くまこまよわが命ぞちりゆふ  
ははまよ

汐ハ干く砂ふ舟く復たの浦

日毎小かたる家をもあひく

復たといふより原氏お復たのまこみか

の頂へハ起りしころ人もまみりれ今ハ里は  
あふいとそろろがそくくたど何をもたふ  
あくめはれはあくとも在ふのまぐこハかる  
ものぬり

と念ふと身楢の本乃中

聖ミツリして聖アミシなをぐら此月もこつ

楢の本乃中よまきとる念ハひろくふそは  
固の人あらむとかくつけく之西行の撰集  
抄などの越え何べー次の句禪之のや  
ふいひうけり聖法何とありくせぬ乃

中の月をもこつと何とあり禪之禪後よまこ  
こゆのやうに何やありた。之世の依借を  
まのものがのりをも何くの禪後何くの  
禪之などけまぐふ解まぐる依借いらぬ  
ものまのりもけけ句よませよまこよ  
禪之禪後よまこ何の禪之禪後よまこ何  
礼依借ハ何らどあはよかざらざまのり  
あをふくめ。句やも底ぐるよたが  
けく併のゆるよまこをうらうちつ  
けよそのまのりをいひてけたらむハとか

くをぬるべし かくもりの子か時ぬ抄らつても  
のし從論ふくもくつひつ

目赤のり たるのま 待ふ他り

ハツふなる子乃 顔はげなる

まぐくふけつ け向まても 阿き目赤のり きをを  
たちおち待ふ 他るハ才子のり げと見て 王戎  
なるのり 成産ふふくめ ぬどろのり ぬぬく  
ともききぬ やつらりたるもの なりたこ  
けつけ向 目赤のり きををろのま 待ふつる人  
を大人よりハをり かくハ才子のり ぬ見と見

たる不ぬ之心をつくべし

小畑 片びー 死案山子 化らむ

るの戸は馬を 酒僕ふたさへらぬ

をのり ぎ附向うくくさう 阿き目赤のり

き風粒のまぐく 見くかぎりなき 惠家飲

秘意の人をつけ くり日く 数升の酒を飲

くろく 價奴阿がちのり ちあらだつて びんを

のちのよ馬を ねさへらりぬる 之世を 酒壺の

間よ かくもく 社ぢけ人なるべし

一 飯や 奇居虫の なふありむ

御合

御合



い代小出く 海苔 さくらんぼ

糸向世の中乃 俗物をさけくろくろく  
ものむくりかえんふ けり何ふたまを  
世のなとひたる。之を世中の家として  
けきふたといへる。さゆりかゆくハるのん  
をもふくあり 後向ハ水を水色をうけ  
たぐその以時ふを向いさるのこふき  
んちり

糸向の音 ずちがらふいびき  
月をほくく。螺カウガイの 証

糸向糸向の音乃 大なる音をうて  
お高軒かきく けり居る人ハ高  
の碁碁と見えく 螺貝よて けりたる大  
おまをうける之志あり 糸向ふいびき  
まば自の向よて 碁碁をうて けりたる  
の音をさしぬく

辛ニ螺ニがらの 健流る 藤次  
角り。眉ふ 化粧 さるる 表

法法の納納の松松のふささめ  
老のけりといひ たるひりつけたる

新  
土

うたならざ

舟 フネ 采 サイ の 出 航 シュウカウ 川 口

標 ウラ 干 カン 小 コ 願 オガヒ ち チ ら ラ ぶ ブ 夕 ユフ 暮 ク を ヲ 見 ミ

茶 チヤ 白 ハク の 堀 ホリ 子 コ を ヲ ま マ ぐ グ ぶ ブ つ ツ け ケ 水 スイ 橋 コウ の 標 ウラ 干 カン 小 コ 願 オガヒ ち チ ら ラ ぶ ブ 川 カハ 口 カド の 出 デ 入 ニル 船 フネ を ヲ ち チ ら ラ ぶ ブ の ノ 。

け ケ ー ー ま マ ー ー

舟 フネ 月 ツキ 小 コ 外 ソト 望 ノゾミ の 娘 ムスメ 乃 ナリ 川 カハ 邊 ヘ へ

一 ヒト 舟 フネ 月 ツキ 小 コ 外 ソト 望 ノゾミ の 娘 ムスメ 乃 ナリ 川 カハ 邊 ヘ へ 一 ヒト 舟 フネ 月 ツキ 小 コ 外 ソト 望 ノゾミ の 娘 ムスメ 乃 ナリ 川 カハ 邊 ヘ へ

な ナ る ル べ ベ し シ を ヲ り リ せ セ 傳 ツタ 世 セ 智 チ の ノ つ ツ け ケ 白 ハク 之 シ

わ ワ づ ヅ り リ 舟 フネ 月 ツキ 小 コ 外 ソト 望 ノゾミ の 娘 ムスメ 乃 ナリ 川 カハ 邊 ヘ へ

陸 チカラ づ ヅ いて イテ 西 ニ へ ヘ 東 ト へ ヘ

肥 ヒ 前 メ の 山 ヤマ 河 カハ

涙 ナミダ を ヲ り リ え エ 都 ツ の 橋 ハシ 折 ヲ

取 トル け ケ づ ヅ 都 ツ の 橋 ハシ 折 ヲ 乃 ナリ 名 ナ を ヲ つ ツ け ケ

茶 チヤ 白 ハク 涙 ナミダ を ヲ り リ せ セ 傳 ツタ 世 セ 智 チ の ノ つ ツ け ケ 白 ハク 之 シ

懐 イダシ 乃 ナリ せ セ つ ツ なる ル に ニ 後 ノチ 白 ハク 之 シ の ノ 向 ムカ け ケ せ セ づ ヅ

ま マ こと ト 取 トル け ケ づ ヅ 都 ツ の 橋 ハシ 折 ヲ 乃 ナリ 名 ナ を ヲ つ ツ け ケ

し シ こと ト 取 トル け ケ づ ヅ 都 ツ の 橋 ハシ 折 ヲ 乃 ナリ 名 ナ を ヲ つ ツ け ケ

舟 フネ 月 ツキ 小 コ 外 ソト 望 ノゾミ の 娘 ムスメ 乃 ナリ 川 カハ 邊 ヘ へ

舟 フネ 月 ツキ 小 コ 外 ソト 望 ノゾミ の 娘 ムスメ 乃 ナリ 川 カハ 邊 ヘ へ

なり

くさきまをふてささちも樹るぬ

父乃軍 茂 起ふし のるな

くさきまのささちもむなりハふるるとくさより父  
ハ軍小出たがられたのが身ハ痛ふし父も  
まごごうりあらざくちをさし月日なつ区  
りく起るもあしきも父の軍をつるなる  
孝子の情をつけるこ

三度 ぼし たれ 勅チキのちま

山さが車ふけづる本をさ何ひ

かれふ酒何とよとみことのりぬふちかいらけ  
を三度まごぼしふるふのこまなど  
思ひよせて山さふたまりりさことつけり  
度やれく月ハむりしの氣なから

老むむらむが 衣うつ ちる

茶向ハ末指衣の巻乃れもうげをさふくぬ  
の後向もせ場之

道のをこれ松小一喝イッカク 志めしとむ

長者の 塵チ 水習ミをあげとむ

お白ハたくまりき 禪僧と見えく 長者をもの

の教ともせむ 興ふ習を投こしたる 粗怪  
此をぐくをつけり

廿ツビ火クラ 短冊つけく 於やり

急 蓋を 脊負 けぐ 臣

つばくらふ短冊つけく 放ち急ふ蓋を夏  
ハそ何グー 大主なまどつふもの 抱びたるべ

一 其れも何の對附なり

羽々 強あらしふ 定ふよらばや

お控る乃ましく 葉の名を忘まき

附ごろハ葉をもらひく 隔る乃み羽々のぬ

乃きこゆる 定ふうちよりく たるぬる 旨に

大りの葉の名を忘れたる 之前白ユカ優ヒ艶

なるぬふ次もやけしくつけり

酒ふ 毎毎何何。 友を何つめ

ぬけゆる 又の一齒乃かたのく

はつけ白翁ふたふき 換あり 其の白ハたき

ろく酒のそくらん人あをを川 糟トて 又の

齒のぬけゆるが かないといつけるもの

これどを理ならむ 又の幸賀 或ハめで

たたおふふましく 又のよハひのかくふた

はをかきめり孝子の情之かく茶臼ふつ六  
れむ引となりしつけるハ名人の事段あり  
まのれども如論茶臼の挽棒時のより  
たふまきまふ登り

山さるハ登も 狐のはまぢろく  
花とひ来やとほつらほら

登も狐のほらがるまよやど山あうま  
見く花ふ人のとへしとくほつらむと  
つよつけ合之茶臼のころまで山さるハ  
のちひはささるともむも後句より

借ドく大地の山さるハはらまき  
白さおぼの 垣を 飛らさ

借らめを標の 杖ふりぬまて

茶臼ま日のほらなるにひらくハおぼの  
垣を飛らさけまを毛房あざく見くよき  
日和見ははせて借りりえほらひあむる  
女のまらげをつける人

細なた記念の 鞆も出む

何も 焚火ふ皆つらり

茶臼ハ天鞆といつる借もの付く後句ハ人

竹舎 八十二

のちくけりるはのけり小あまのけりまらけり  
はあり

供<sup>シガ</sup>指<sup>シ</sup>ゆし 美の敷位

本<sup>キ</sup>急<sup>ツキ</sup>のたかが 碓や留ぬらむ

たぐそのゆふれ附合之本急の奉を碓ふ

— ぬるあ小階塔

方けりの侍中ふにくまひて

獲<sup>カ</sup>こぐし たる小綾もくけき

ぬ人め子の情をつら— たり平生に教とく

おひひけりであど— 侍中にくまひて

のたまく小綾獲こぐし たるをさみわのさき  
ふいひたるよ— ぐあ

船<sup>フネ</sup>追<sup>オ</sup>のけり 蜻<sup>トビ</sup>の喰<sup>ク</sup>飽

音<sup>ネ</sup>あまハけらぶる 神乃まらう

ともあり— まりあた其扱のけりたま

世にハありよ

おねとま白田もんたの本位よて

つらも若采小 露の卵ゆる

春うさ目茶とりバ才二まよあべ

おとあさ— ねく 長持の上

とも一びの氣めづらしたまのえ侍  
 も持のこふ殿是たみもしく、麻もさぬやう  
 さをさのえ侍と思ひよるといふこ  
 いうやうのえも志つべき存實  
 強比強巴をかえう、出るぬお  
 古ものかくりも何るべそねもうがを思ひよ  
 せしく強比強巴をかえしく、糸おより出る人  
 ハ何ぐの君乃いろものこちのべ  
 心陸ふこ下るぬおねぬの坂  
 宗長の夏寸白も筆の條

附えきこえるやうにて一海ねぐやうならず  
 綴強き袴小秋をうちねと  
 強實の白髪をい片見付たり  
 前句禱の綴乃強きをうらめるとつ小を杖  
 の字小心をうめしく、衣の身ふるぐハさむつ  
 しくねがぬ人の老るるちありといふことりて  
 えドめしく強實の白髪を足付て老をさす  
 よをつけり  
 わが顔ふさぬうりた。おまの花  
 強ふお鏡とつみーさうづき

附合 上

六十四

花の夜のもとに極まりまゝの人あらば故様と  
 いへる盃ならむつけ白のひびきぬとつよをしこ  
 てよハ依の化名あらばいうもともなづくべき故  
 故様といふよて顔ふ花のちりかゝるりた  
 うまがめーまふふうく味ふべた附白之  
 蘇東あふさるるハあゝすとあゝらば

粟 稗を日毎の <sup>トキ</sup>みよ <sup>トキ</sup>みよ 喰ひ飽く  
 ぬよといふ一字うて僧とさるせりもいふり  
 も捨身の行あらばいうなるゆゑいなるよふよま  
 つくるべりれどさきさぐる肉身あらばかゝるる

里ふくろとまらば毎日の粟稗ふくむド  
 果々いふはまいとをう

け 秋も山の板橋 <sup>クツ</sup>あはれり  
 赦 <sup>タマ</sup>免ふもゆるくひとりける月

赤白あやしく子家の柱もあまき株木もたゞ  
 山の板橋もあるといふあさまさき不を忍ぶ  
 と見て赦免ふもひとりとりのこちまゝ流  
 人をつけたる之 <sup>シユム</sup>信實 <sup>クム</sup>が侍もあはれ  
 もとの <sup>クハ</sup>廓ハ <sup>クハ</sup>細 <sup>クハ</sup>細 <sup>クハ</sup>細 <sup>クハ</sup>細  
 し聖詠乃春も一かふあはれたまひ

将合  
 廿七

廿六



お白むのハ抱女町まゝに舞臺あり  
ふもくハ名のとけりまゝにハ梅畑小形り  
お撫り星うつる内まを見まゝに重浪もあら  
たまりとつける之廊に重浪とりひ  
びさあり

まの雪小先何れとや金揚て  
麻巻あがらふ化粧つと

茶白かこひあまふ何つありて  
たてたよ雪の然あまがけりまゝに  
何くらむとくを何げてよりかりとる風流

の席を懐白依の川精まゝに在るあまの

抱女乃抱屋とてあまつけ合之

轆牛の売を踏つおまきる

身ハ蝶此何なるといふや受つらむ

あまらあままき附合あまど一白をまゝに  
いひのべたり轆牛の売を踏つおまきる  
ともお踏手たよ之蝶の何なるといひかけり

ゆえつ敷月を何れおまき見て

出 澄泉の舞へる 陸奥の社風

くもあまふのりをつけるまゝにた附白

あり

何れ時ハ解ももるの入ぬらむ

樟の小枝小意をへだく

日向うき意小思ひ一づみく解ももるの  
入はぐりある之後向ハ解といふ小樟をつ  
けく意を向つうひたるえ

霜降山や 各処友たもくげ

何れハ軍をいさるる外も来て

山ふおのりくゆる何れはまふ解友の面影の  
さくありといふさき解げたるは

をろのまづけく軍の出立をいれまで

ゆきくゆるのほまりさるる

引雪車ひらぬの夜有て

たのく 武士れ冬ごもる宿

日向ハ小越の大雪あるべし後向ハ小園の  
城を攻むと大軍たうひまらどもかの大馬  
小馬の蹄跡まべも何らむむなりく武士  
れ冬ごまりおてまをまつさぐこみや

空小石水一うき名配り

手松千両き統を内一入く

お向たるけちなくさるのいほ部をゆるら  
まぬらさし女あり後向いそのまゝその  
みくわりなき契のほほど何り水と  
住かへる宿の柱乃月を見よ  
いほ何くらむい糸が終  
いふもも解しが

ち山つごとのさ年ホーどる  
淋しさを海なるもきく来まふ  
附向もつけえもきとえとまゝ之を  
ありに海入る人もなくち山つごとの

つちのよー

花をたるとけりをみちびきて  
酒の迷ひ乃けむる春風  
前向馬ふまゝとけりと人を送るはま  
後向酒の迷ひのけむるたぞ碎のけむる  
水とけりをみちびくとつちの迷ひのさむ  
とびくをたよとさるをつくべ

馬市くくく狗むりへをむ  
標ける父が馬をとりつへ  
附ぐる馬市お出るほどのものくら

馬市

馬市

所合  
なまいりぬなりぬご駒むらへまいつもくし年  
久しく出る男ふりて父の代より侍めたる  
弓の茶をも持つてたる古き家あらむ  
雪ヨ降ぬ松の木のふとゆり  
社 踏 志ける 杖 乃 妻  
茶向何りのまし之後向も深き山と見てい  
のーと思ひよりりたり林子むとつふすり  
妻と通て志るをを之にたろるしきけぞ  
ものをかくやけりくつくりたる名人の身段  
あり

祇 洗ハむと茶あろくぐあり  
茶ありの令ハ衣をさきぬ  
いたる附るるや  
牡丹の毛下 風不のりあり  
老僧のいで 小盃とぐめむと  
茶向園の牡丹乃夕茶をふくめるふく  
るよき風たろよく吹けしきいうもなる  
の庭と見く牡丹見の誼をゆをつける  
秋更く枝子小か内む茶のい  
くくひままきるみ波の谷程

社

社

持子の何ごころもななくく唯礼哥うとひす  
ゆきよりのれなるはまをのべらつげごる  
ならむ

は株のさるふ見ゆる 舞火

奪 執供のの者も 疎よく

市株のすろ小見ゆるは舞へ供の者をとるな  
らむとの附えふや

牛の子ふあゝるなぐさむ夕るん  
る雲まーふとくろの 唸

さくえがくしまひくさむとをらばれうらく

ハひがきいせむ

松むさをびたしく 玉の境目  
永楽の古きさる領をいたきて

永楽の代よりお朱平たまりめく寺領  
御載のさなるべー 附えはきとえたるま  
なり

捲上るは登ふ 兒の遠入く

わづらふ人平 昔る 秋風

二白のユ合渡も落ぬべー 平を捲上げ  
兒乃遠入にうちまはその母をどのやと

たゞに秋風をいとひたるはるる之

澄エ盤いとちむ山陰乃塔

様エ多村ハ浮世の卯此春家て

はさくらろなりたゞそのをこれ春家とて

星みふる散るにふ散るのかゝると

まよハ 拙女の名をとむむ月

お白ハ星みふにわりき人ふかざらば散るにち

散るのかはまづくみふるとは後白ハ七夕みふれ

なく一舟よと或ハ吉人の一舟をもてあそぶも

のちれがまよふ出くる拙女の一舟散るは

かついやーき拙女もて一舟をよめばまよふも

入りくちるをとむむよとくらやちたはま

あゝとべー

はまよふ出くる家路志る

ゆゑと候本信を屋のわげらひ

けのこむゆなり

雪みろれ沙をの市れ名跡とて

得いその日を 雪屋のあ

得いその日ハゆみ居てもはるまじと雪屋の

まゆりくうのちありハ依階の連年を

いふものなるべし 附さるるに ぬらうと

やもめ 鳥乃 出さふ 晩鐘

平つゝも 聖も 越なき 花の峰

附意ハ長 詠のくふも くれて 聖に又いづの  
つゝもこの 峰をこえむと思ひのやふた  
うちのさるろーくやもめ鳥の 鳴をきいて  
まづぐぬま子を ねきき 妻よたる水てききき  
あよねもむくよくくろくろくを 詠のゆふ  
ぐれたるらむら けれど 花の ぬをぬがまど  
むうさま ねりーとのつみごころ

救くふ ねのお乃 指つゝも

後 手くつれ 余りらひ顔

くれも 何の箱の 附合へ 前向にかざりたるき  
ねごも 指つゝく ならりたるを けらひいづね  
ハ 後うつけねむ 志うもよく つまねたる 向よ  
救く の ねをいひつゝ けらひいづね  
何ひく けらひいづね なるるを けらひいづね  
たよ ねをいひつゝ けらひいづね  
藤の 羽をーむ 蝶 幅の 糸  
春あみ ねをいひつゝ けらひいづね

前向や片しく何れなるふと見しく見の影  
 スる香とつひたり 鎌堀の乳小兒をすえ  
 く刺刀カミヤリいつてさるは情いふより何れなるら  
 らむ折くらまを毎片へ降くくさめやなるふ  
 見のよりい後りぬまづくと泣ざらむかぬて  
 ハ鎌堀の乳小兒の影をむを見の影なる  
 添カシひたしへたる之  
 御カシ遊カシハそのなをたまで切せづめ  
 松カシりさたらしは 衣 徳のちさ  
 何りのまゝなる御合ならむ

ちまゝこの神ふいののかねて  
 供カシしく常あきさふもあづからむ  
 前向ハそとえとほまゝしてけぐるハコレニツ性  
 などの侍あらむ君の思ひゆさめふに  
 走カシくがひて君の志乃くらや海カシさふ常なき  
 子カシあゝまでもえづりく志のりくこそさから  
 へたどたりむれつひたるさまささめ  
 朝カシづめの妻カシ帯カシさの侍乃奉  
 りふも命と 時乃 くら  
 前向ハ侍さたどりの朝づめふらちるにま



待の志年乃きこゆるふききたを飲ドて時  
と名のりゆも何れもと何ふた卒のびくらむ  
と何れもなるる日をつけくる之なるや妻帯  
さを崎と見くる附合之

おぼろの鳩乃 舞ふの月  
ものいへばおきふびく春乃風

はきこえたるいこきこゆ

糖ツルをねきむる 城の何らせ

おをねいしなき心を化糖らむ

附ごろ人を埋める城の何れおきこ

幼おのねくを見くゆいなき志おの  
おきくくつうげよけりあゆいぬ  
あるお中くふかあしけのまけるあふ  
へはこや

お互しめむ唇を徳小生をて  
月内へ津ツルき陣中チヌの市

お向お互しめて料理をなす唇を徳小  
いけをくく悔向むづけなるやまを  
おのふお何らむく陣中のあふおら  
はたこらたこ

小神 袴を 贈る 戒の師

わがぼむの母ふ 似るもゆりて

赤子のふ戒ビユカイに小神 袴まで 戒師より 贈

ままあるこが ちかきまづ ぐくも ちか

わがぼむの 戒の母ふ 似るも ぐゆりて 人 姑

をつくも 附合あり

赤子のふ 赤おつて ちかき 古分集

花に 対き け 坊の 酒の 花

前白いうのも ちかき け ちかき 古分集

ある だし 附合あり ちかき 古分集

ちかき ちかき 坊と 見く 花の け 坊の 酒の 花  
を ちかき け

赤だぬ 赤き ちかき 坊の 酒の 花

赤木をつりて 古た 赤を見む

赤木をつりて 古た 赤を見む

赤木をつりて 古た 赤を見む

赤木をつりて 古た 赤を見む

赤木をつりて 古た 赤を見む

赤木をつりて 古た 赤を見む

赤木をつりて 古た 赤を見む

赤木をつりて 古た 赤を見む

豆くくぬ杖ハ何となく思  
古州所を寺ふなりヒツカデキ 松皮サヨ

古は不致さに取したらむハきハめくもの  
まどく思もあくらむ世の白ハ帯ハの杖の  
外ハ思ハ何とふてあくらむとの借杖  
月見よと引起さく心く恥一き

髪ハゆがまらるツスモ 藤の 老翁  
前向者よりあたる人をさばりりぞ  
たあきものいよび一延く月をも見ぬ  
くといまきりたとけゆくるが 恥一きと

後向やどくなた人と見くのであきはま  
をつけくるこ

白的ハク 堀のまき 咲る山吹  
春を經一七ツのま乃ちうら石

七ツのま乃ちうらためしふ引とくる石のを  
とあふぬりても立水ぞ思ひおき存あふべ  
しちうら石的堀の何とけふ何とべとけま  
なりよとべくかふるのハ衣家ハよくあふ  
るの的堀とつあふくつけり  
かさ消るよなハ聖中の地花よて

つりてさるる山太の七年

前句ハ世中の地蔵の妻ふまゝと存とす  
階替あり後句ハ世宿など一たると  
見くくの附合之

鳴子様、ろく片ノ殺の定

盗人ふつれそふ姓ガ方位を位て

前句ハよのつねに田舎のはまなるを川  
橋トく盗人の宿の鳴子ふまゝへたるつけ  
向ありあつるならん盗人の妻とありて  
身をくやとあるとす何れむべし

秋の墨待の宿 宿ハ後

ものいハ小い立ふ顔をたしい

前句宿廻に秋の墨待かきたる風流の  
まがたのなまぢりなる人乃面釈ありどた  
しうふ待ともけしがさきやうまを後句ふ  
ていさでたものいひうけられまことふまゝ人  
りしとまぢりし小い立ふ顔にりれてまらぬ  
かふふもてあつたはむりくはまこ

盗人といはた二十トイロクといの里

松の根小い及をたあらべくまらむ

前句何となり水どとろくの里といふ谷の  
何や一たふ盛人のをるべきふとるゆ後句ハ  
まなはちろのたろろ一たふよふ十の歌を  
いふもの、唯宿してことふ大と一の歌とい  
ふよて一いふといきやうき見えたり

何の月も意ゆ意ふとるね一いふ

意ゆともさえぬ 袖のいさきに

意のまうことをつくさる 附合之意何れハ  
ころ月を見てもかた一いふといふ月  
意ゆとつけて意ゆともさえぬといへるとかほ

衣をさてて 寝き 世の中

酒のめバ谷の朽木も 佛あり

句の朽木てハ衣をもちまてて、木のあまかま  
ハぬをいことを教ふは証候と見とく酒に酔  
たる目よハ谷の朽木も佛のやうにみあると  
いへる附合たふ水ど意どころハ衣をさてて  
世の中を睡くままむといふハもと及ん何  
をいふは表はいつりりねどたるとして朽木  
佛ありといける妙くのよ段たるとい

洞の地は花ふらねる みるぬ

昔の菊の穂の泪や深つらむ

山陰葛原

冬を隣々 旅人 某州

ふも又昨日をねむ石のうへ

まことふけつけ白涙を流すべしとくむと

まればかへつゝ竟成換ふふく<sup>モクニキ</sup>跡<sup>ニキ</sup>後<sup>ニキ</sup>ま

る

芭蕉公羽附合集巻評注上巻終



